近世講壇叢書
第六卷

神興の流

著 チャールス・ムーディ
譯 吉田脩夫

井の歌
ギデオンの響と解脱
善良なるサマリヤ人
エサウの零落

253
783

日本基督教青年會同盟本部

特61
160

神興の流

ヂョーヂ、アダム、スミス著
吉田脩夫譯

日本基督教青年會同盟本部

明治
43 7 7
交内

小引

原著者、ヂョーヂ、アダス、スミス博士は、現今グラスゴオ大學の教授たり。英國の神學界に於て、第一流の學者なりと云ふ。氏の著書六七種の内「イザヤ書講話」「聖地歴吏地」「ドラモンド傳」等遍く世に如らる。本書は、著者が、嘗て蘇格蘭アボルヂインの教會に牧師たりし間、其教會に轉ぜし法輪の靈響の集錄『罪の赦と他の説教』の中より、特に四篇を撰びて譯出したるもの也。

該四篇中、ギデオンの譽と解脱は、原書には、單にギデオンと題せられ、エサウの零落は、單にエサウと題せらる。然るを、斯く題したるは、譯者自身が、原名に對して多少飽き足らず思ひ、讀者にも

おもしろかるまじと想像し、其演述の内容、及び演述のよりて起る主點に關りて勝手に改題したるものなり。若し夫れ改題が原述の意に剴當せざらんには、是れ固に譯者の不明の致す所、偏に著者と讀者に向つて謝罪する所あらんのみ。

此一卷を題して『神與の流』とせしは、書中の一篇の題目を表出するは、如何にも當らず、本書是れ著者信念の泉に、湧きかへりし神與の餘瀝、神與の流露ならざるなしと感ぜしを以て、譯者は又た然か勝手に、表題したる也。

明治四十一年六月末

譯者

目次

井の歌……一
ギデオンの譽と解脫……三五
善良なるサマリヤ人……七九
エサウの零落……一一四

神興の流

ヂョーヂ、アダム、スミス著
吉田脩夫譯

井の歌

かれら其處よりベエル(井)にいたれり。エホバ、モーセにむかいて、汝民を集めよ、我これに水を與へん、と言ひたまひしは、この井なりき。時にイスラエルこの歌をうたへり。

井の水よ、湧きあがれ。汝等これに歌ひ返せよ。此井は、笏と杖とをもて、牧伯等これを掘り、民の君長等之を掘れり。(民數略記、二十一章、十六節—十九節)

東方の生活に於ては、水汲みよりも、猶ほ下等なる勞働はない。

木伐りと、水汲みとは、聖書の中に於ては、最も下層の奴隷と異名同義である。何世紀が間も、日毎日毎に引張られたる柔軟の繩か、終に深く石を擦りへらして居る所の井、其れ自身に就いて見れば、それが分明するのである。又た其の民族の婦女が、仕事に集合する時に、其瘦れたる容貌を見れば、その消息が分明するのである。ダマスコのエリエゼルは、井戸の傍にて、新婦を見出したけれども、それは、まだ、世界の初の頃の話である。基督が解逅し給ふた婦人は、下層の勞働者であつて、第一に、基督に『主よ、我渴くことなく、亦た、此の處に、水汲みに來らぬために、其水を我に與へよ』と、願つたのである。水を汲むには、井戸のある處まで、行かねばならぬ。水を

汲む順番に就いて、爭が起る。深い底から、釣瓶を引き擧げねばならぬ。而して其の水瓶に水を充たして、高く頭上に戴ひて、家に持ち歸らねばならぬ。何となれば、東方の諸國にては、仕事をして居る間は、婦人は、殆んど、若くは、全く歌はないからである。

男子が仕事に着手する時は、牧羊者などの如く、屢々歌を歌ふ。而して其の歌は、記臆と希望とを以て、彼等の勞働を讃美するが如き種類のものである事がある。茲に、說法の題として取つた歌も、其の種類の一である。此の歌は、最も聖書の古い部分の一節であるが、聖書中に編入せらるゝ前に、恐らく、幾代も幾代も、井戸のほとりに於て、牧羊者どもか、砂利踏みならしつゝ、陽光輝々たる大氣の

中に於て、勞働者の口傳へによりて、傳はつたるものであらう。此の歌が、始めて歌はれた井は、何處であるにしても、思ふに、多分此の歌は、他の多くの井の日毎の水汲みによりて、傳へられたものであらう。パレスチナに於ては、水汲み場所があつて、其は井と水溜とを兼たものである。水の涸れた川底の近くに、深い穴を堀ると、底の方では、しきりに水が湧く。此を長い繩の釣瓶で、地面に汲み上げるのである。此の歌をうたつた水汲み等は、井が活きて居ると思つたのである。『汝等これにうたひ返せよ』と歌ひ合つて居るのである。即ち井の水の音樂に對して、彼等自身の歌をうたひ返して、かわるがはるうたはふといふ意味である。所が、暗い穴の中の靈のみが、

唯一の井ではない。人間の心情も、それに應致して、湧き返つたのである。『井の水よ、湧きあがれ、汝等これに歌ひ返せ』とは、井が井に呼ばはつた所の歌である。人間の歌ひ返すのは、如何にも、ふさわしい事である。此歌は、我等をして、理想的生活を想起せしむるのである。多數の國民は、理想的生活は、黄金時代として、過去の事と思ふけれども、活ける敎會は、將來せんとする天父の王國の一部分として、將來に期待するのである。余は

此井は笏と、杖とをもて、牧伯等これを堀り、民の君長等之を堀れり。

と、いふ句の意義を以て、人民の指導者たる是等の人々が、靈杖を

揮つたとか、又は嚴肅なる儀式を行つたとか、何か特別なることを行つた後、普通の勞働者が、地面を堀つたら、水が湧き出たといふ樣に、解する說を取らない。『堀る』といふ文字は、上述の如き意味に解するには、餘りに明瞭である。寧ろ牧伯及び君長等も、躬自ら地面を堀ることに、手づさわつたのであると解すべきである。彼等が堀つたのである。かるが故に、幾代も幾代も、水汲みどもは、井といふものは、大人物によりて、創めて堀られたものであるといふことと、水汲み仕事は、今こそ、下等の勞働者となつて居るけれども、元は、發明であり、熱心であり、誠實なる友愛であり、且つ、決して素性の卑賤からざる者であるといふことを、回想したのである。

此回想は、彼等をして、勞役に從事して居るといふ感を、失はしめた。斯種の記憶をもてる義務は、決して卑賤なることか出來なかつたのである。始めに、其の仕事を祝福したるバプテスマは、依然として、其の仕事の上にも存じて居たのである。

（一）

斯種の歌には、多くのインスピレーションがある。我等は、各々職業を異にすと雖も、總て平凡なる生活の役者である。我等は、常に、平凡なる生活を崇高にせなければならぬのである。苟くも、勞働する程の人は、隨分、粉骨碎身する樣なとも、せなければならぬ（恰かも、東方諸國の水汲みか、同じ古繩を、手より手に渡して働いた如く）然

るに、多くの人々は、しかも道と教會との役者たる人々でさへも、動もすれば、其の生活を面白からず思ひ、且つ其の仕事を卑賤なるものゝ如くに思ふのである。武勇談は、軍人にゆづり、不思議なる事は、科學者の研究に委ね、地位の尊貴は、政治家に任せて、さて我等の事業は、如何と見るに、如何にも、貧相にして、不滿足だらのけ如く思はれる。斯くて、我等は大ある記臆の遺産をもてる我等自身の生活をすてゝ、文學及び藝術に依つて、一層幸福なりと想像する生活に入らんとするのである。此れ何たる痴漢ぞや。文學及び藝術は、我等自身、及び我等の事業の上に、新光明を投じて、我等の地位か、如何に高貴にして、又た如何に光榮であるかを示すものである。

即ち、我等をして、退却せしむるより外に、何の用をもなさない。井の歌が、其の水汲みに對してなした所は、此を示して恰適である。故に、如何に困難なる勞役に於いても、苟くも、それか正直であり、且つ社會の進歩を助くるものであれば、笏と杖とをもつて、井を堀つた牧伯、君長等を歌つた人々と、一味に感激すべき記臆を、利用することが出來る。我等かどんなに卑賤なり、と考ふる所の仕事にしても、其の本源を尋ぬれば、天才によりて、發明されたものである。極めて、輕便なる生活、たとへば、舗路を歩む位に、不注意に用ゐて居る事柄、即ち點火、アルファベット、日常のパン、貨幣、車輪、乃至望遠鏡、何れも、此等は、昔の人か、危險を冒して、發明したものである。

其の人類に對する感化力は、文明開化の現代の無上なる光榮と思ふ所の發明發見よりも、寧ろ偉大である。今日、吾人が用ゐる國語は、チョーサー、シエークスピヤ、はたミルトン等が製作したものである。我等は創造的天才の語法音節に倣はずしては、大なる言葉を使用することが出來ぬ。又た意味を勝手に變化せしむることが出來ぬ。臼磨きかまわす曲柄も、汽車に使用する機關、及び制動機も、海を帆走る船も、それを發明して、人類の用に供給するのは、皆な人物の力に待たねばならなかつた。多くの場合には、天才に待たねばならなかつた。手工でも、商業でも、教育でも、醫療でも、乃至公益事業でも、一切其の起源には、必ず聖者及び英雄が居る。『笏と杖とを

もつて、牧伯等此の井を掘り、民の君長等之を掘れり』。

余が、斯の如く、分り切つたことを、説明するのは、唯だ吾人の生活の要素が、驚嘆すべき事柄、即ち、最も偉大なる人々の血液と愛とを以て、浸潤されて居るといふことを、感せしめんためである。知識といふものは、無慈悲なる東方の太陽の如く、昇れば昇る程、生命といふものゝ色彩を薄くして仕舞ふ。即ちゆかしさ曉色を散じ、且つ吾人の周圍の事物より、其の色彩と、不思議とを、奪ひ去るかの如く言ふ人がある。然し、それは誤謬の見である。知識は、決して、神の世界より、不思議を取り去ることを能くしない。又た神に對する信仰を奪ふことをも、なし得ない。生活といふ者の魔力と嚴肅と

を、感せざる樣になる人は、むしろ知識を拒む人である。勉學を廢止して見よ、必ずや、嘆美、畏敬、及び感恩の念を失ふであらう。然かも、是等の諸念を合一したるもの、それか禮拜である。精神的信仰の力そのものである。知識は吾人をして、吾人か處理する日常平凡の事柄の源泉に、感激すべき事實を發見せしめる。知識の吾人に供給する貢献の中で、此事以上に宗教的なるものはないのである。知識は、何物も、低廉でないことを教ふる。知識は吾等か如何なる人の繼續者であるかといふ事を想起せしむる。如何なる大人物の痛手を負へる手が、種々なる義務を、我等に委托したか。又た我等は、雲の如き立證者に、圍まれて居るかといふ事を想起せしむる。

結論に先だつて、此の教訓か、教會生活に對しても適切である、といふことを見やう。それには、同樣にインスピレーションを、要求する他の二個の仕事を比較しやう。例へば、教育である。教育事業程に、記憶といふ者か、偉大なる感激を惹起するのがあらうか。偉大なる人々が、平凡なる勞役に服したといふ追想の、教育事業程に、多いものか何處にかある。彼等は、單に其の献身により、屢々些々たる項目とか、單調なる方法とか、思はれる者の意味を高尚ならしめたのみならず、彼等か勞働者であるといふ事は、吾人の責任に光明を與へる。且つ彼等の發明と勇氣とは、彼等自身のそれをして、變更せしめ、改良せしめる。今一つの例は、誰れにも當てはまる。我

等は誰人も、政權に參與する事か出來る。政府の職務は、唯た民衆によりて行はれる。共和政府は、天才若くは少數者の勢力によりて、執行されるものにあらず、寧ろ無數市民の辛抱强き勤勞により て成功する。即ち地方會議とか、局とか、省とか、委員とかの種々の制度を要するのである。若しも、是等の勤勞か、面倒にして、つまらなく思つたならば、其の歴史的記源を想ひ起せ。日常用ゐる井の掘手を記臆するのみならず、貴重なる生命の犧牲によりて、其の土か清められ、且つ壓制に對して、防禦せられたる事を記憶すべし。猶ほ又た、如何に、堅實なる性格によりて、其れか清淨に保たれたかを記憶すべし。高き人も、低き人も、すべて此事を領解しなば、我國

の政治は、綠翠滴たる夏山の如く、光榮を以て、輝くに至るであらう。

（二）

世に降臨して、一切萬人を光被する光自身が、肉體をかりて、我儕の間に住んだ。我等は、幾百萬の記憶中、一個絶倫の記憶を有するのである。我等は、我等今日の生活の神聖と、光榮とを辿りて、單に神の光舉し給ひし、彼れ此れの大人物に溯るのみならず、實に神御自身の化身に到着するのである。キリスト、イエスの人格に於て、神御自身が、此等の我等が井を掘り給ふたのである。余輩が上來述べ來た自由も、職務も、又たインスピレーションも、キリスト、イエスによりて開かれ、且つ成就された。他のものは、單に斷片的

に、生活の意義を説教し、且つ高尚ならしめたに過ぎないのである。併し、基督は、純圓無垢に、同一の生活を試み、立派に成功せられた。而して此を莊嚴せられたのである。基督は、すべて、我々の關係を成就し、我々の誘惑を感じ、すべて、我々の重荷と悲哀とを、負給ふたのである。化身といふとは、多くの神學が、滿足して居るが如き抽象的なものではない。福音書の化身といふものは、こうである。先づ或家に出産する。母の顏を見上げる。兒童の折には、其兄弟姉妹と一所に居る。青年時代になると、友人に交る。壯年時代に達しては、其の同朋と共に、大なる國民生活に入る。我家の仕事場にては、從順であつた、訓練をした、勞働をした。外に出でて旅行しては、教化し、訓誨

し、議論した。彼れの譬喩は、いかによく、彼れが社會に於ける各種の日常普通の務めに、觸れて居たかを示して、餘りあるのである。僕と主人、裁判官と訴訟者、王と其の副官、漁者、牧羊者、農夫、地掘と寶探す人、門邊の乞食、市場に於て傭ひ入れられざりし人、執事と商人。基督は、實に是等すべての人の生活を生活して、其職務に光榮を與へたのである。且つ基督は、是等の者の關係、性質、乃至方法をば、神の我等に對する關係、及び我等が神を求めて、見出す方法の説明として、用ゐ給ふたのである。譬喩は、神の化身の廣さである。誘惑と、苦痛と、疲勞と、世の罪のための恥辱と、見捨てられ玉へることと、十字架と、死とは、其の深さである。

其の廣さと深さとを、同樣に記臆して居れば、日常生活の一時間一時間か、極めて神聖てあることが分るのてある。十字架の死の救濟的恩寵を、其信者に示す所の、主御自身の制定し給ひし儀式に就いて、彼は言ひ給ふた。『我を憶えんために之をなせ』と。若し、かく信じて、其の如く實踐實行すれば、十字架の死によりて、無力と失望とを救はれたる生活を遂ぐるに至る。悔改の機會と、自由と、愛とを得るてあらう。然し我等が主を記念するといふは、これのみに止まらぬ。化身の成就に依つて、普通生活の如何なる部分も、主の記念にあらざるはないのてある。主は豫言者によりて、言ひ給ふた。『我は我か足場を光榮あらしめん』と。義務と艱難との道程に於て、今日我々の足場な

る所にして、同じく主の足場にあらざりし所はない。且つ、到る所、主の忍耐と、勝利の薫りに滿ち充ちて居るのてある。忠實に、從順に、而かも決定して生活せよ。すべての仕事をなすに、主を記念せよ。生活そのものをして、一個の全き聖餐式たらしめよ。眞正に、信仰と悟性とが、覺醒し來れば、生活上の毎時の聖餐式は、主の臨終の聖餐式の如く、單に主の紀念たるのみならず、又た主との交通靈應てある。恰かも、毎日、水汲みの勞役を仕事となせし女か、井のほとりに於て、基督に出遇つた通りてある。其の婦は、先づ基督に向つて、『主よ、我渇く事なく、又此所に水を汲みに來らぬために、その水を我に予へよ』と願つたけれども、基督は、其の勞役を、取り去らうともなし給は

ぬ。又た其願に答へもなし給はぬ。けれども、基督は、彼女が水瓶をもて、井に來る毎に、彼女自身の心の中に、有つて居つたものを與へ玉ふた。斯くて彼女は、基督を、單に井のほとりに於てのみならず、路上にても、家の内にても、見出すに至り、終には日毎の仕事其物が、基督との交通となつたのである。彼女の如く、我等も、基督に解逅するならば、それと一味の惠澤にあづかる。『主よ、汲器なく、井も亦深し。爾何處より汲みて、其活ける水を持てるか』。彼女は基督によりて、其心を淨められ、基督の言葉によりて、其内に生命の泉を湧かしめられた時に、心内の深き井を測量して、此の疑問の解答を得たのである。人間の靈的生命を支配するイエスの力は、古今獨歩である。其力

は、創造力に異らない者である。我等の先驅先達をなせる偉大なる同胞の群集を召び起して、すべての者を普照し給ふ眞光明を讃美するは、もつともの事である。然しそれのみならず、我等はかくして、彼等偉大の助力の盡きる所に、基督の御助けが始まる、といふ事を告白せねばならぬ。彼等とても、固より同信者、同行者として、其模範と、其の勢力、及び忍耐の感染力とによりて、我等に加勢するのである。然し基督は幕の中までも、這入り給ふのである。彼等偉人は、人生の光明と、暴風雨との際に於て、役立つのである。我等が繼續して居る事業に於て、神が俱存し玉ふたといふ證言を與へる點に於て、役立つのである。けれども、基督は幕の中にまで、這入り給ふのである。罪業

のために、寂莫を感ずる時、誘惑に對して奮鬪する時、此等偉人の群集は、遠く彼方に離れて、何等の役にも立たぬ。彼等の効績は、我等に對して、全く無關係である。彼等の愛は、全く無用である。正に此時基督は、我等の内に突入つて、其の神たる事を光證し玉ふのである。我等の罪の念に對しては、基督は『我れそれを負ふ、汝等は許さる』と告げ玉ふ。我等の罪惡に對しては、『そは我が負擔である』と語り給ふ。我等の微弱については『我が恩寵汝に足る』とのたまふ。我等の恥辱と失望とについては『我は我が仕事を汝に委托す。喜び勇め、行いてそれをなせ』と申し給ふのである。他の力も、人を助けて、悔改に導いた。けれども、基督の十字架の下に

於ける程の眞實なる悔改が、何處にもあらざるは、歴史上の事實である。他の聲も、新生の必要を叫んだ。けれども、基督のみが、死せる靈魂を復活することが出來たのである。我等は偉人の追想によりて、我等の日常の生活が、到る處に、光榮を有し、且つ我等の命ぜられたる働き場所は、皆な勇敢なる同胞の戰場、若しくは占領地であつたといふそのために、希望に充される事を、神に感謝する。是と同時に、何よりも眞先に、我等は基督自身を加持すること、及び神が基督によりて、我等に救濟を得せしめ給ふことを、記憶せねばならぬ。

(三)

さて、是より記憶の宗教的用法を、我々が、或は其の會員として、或

は其の役者として、關係して居る教會生活に適用して見やう。予は教會の生命なるものを、一つのまとまりたるものとして、言ふにあらずして、個々の教會の種々の仕事、又は行動を意味するのである。今日の基督教會なるものは、大に其の價値を損じて居る。それは教會の内外の種々の因縁の協力によるものなるか、今一々之を列擧する遑がない。是等の因縁を退治するためには、古の偉大なる男子、はた婦人が、如何なる機會と、如何なるインスピレーションとを用ゐたかを、追想することが適切である。最も適切に『此の井は、笏と、杖とをもて、牧伯等之を掘り、民の君長等之を掘れり』といふ句が、當てはまる仕事は、恐らく他になからう。

歴史上に於ける基督教會の勢力、地方の教會が、世界に波及せる貢献は、歴史家の研究を待つ問題である。遠き遠き古より現代に至る迄、人生の最も強き潮流を養へる所の、幾千の、殆んど、忘却せられ居る井が、歴史家によりて、明瞭に光闡せらるゝであらう。種々なる種類の性格、文學、及び藝術に於ける多くの不朽不滅なるもの、教育、及び慈善事業に於て、全世界に普及する多くの事柄、すべて是等は、教會生活に起源して居るのである。

此事を證明するには、先づ聖書より始やう。今では、半ば人類の懺悔所である詩篇といふものは、其始め、世界中、最も顯れざりし地方の一つに於ける、山上の小聖所と、集會とに於て用ゐられた讃美歌

である。神の言葉として、愛藏せらるゝ使徒等の書簡も、もとは男女の小團體に發源せられたるものにして、教會生活の事情や、義務や、誹謗や、乃至罪惡を論じたものである。經典より移りて、初代の教會歷史を見ても、同一の眞理の説明がある。公同教會に於ける最も威嚴ある職務も、其名稱の示現する如く、本は初代信徒の團體中の職務であつた。個々の教會が、始めて貧病者救濟、奴隷償還の方法を講じた。修道院といふ者も、藝術及び文學の母であつた。時としては、國家が其の欠べからざる保護者であつた者である。されど、最も美麗なる宗教的建築物の多數は、其ものと、田舍の教會であつて、地方信徒の敬虔と、巧妙とを示して居ることを、忘却してはならぬ。品性は、

數々修道院に於ても、驚くばかりに、修養せられた。又た教會の聖職によりても、美はしく訓練せられたのである。けれども、修道院の聖徒等が、洗禮を受けて、基督の名に入れるは、田舍の教會の水盤に於てであつた。田舍教會の學校、田舍教會の教壇より、彼等は基督の御心を學んだ。彼等の品性か、始めて陶冶せられたのは、普通の教會員の模範と祈禱とに因りてであつたのである。

同樣の眞理は、宗教改革以後の歷史に於ても、同樣に顯著である。宗教改革以來、今日に至るまで、基督教の紀念碑ともいふ可き澤山のものが、平凡なる田舍教會の牧會中に出來上つて、集會上の必要に應じて居る。頑を避けて、新教の歷史の兩端より、一二の例を擧げ

て見やう。ルーテルの讃美歌は、我等の熟知する所である。此歌は、祖國に於ては、國民的讃美歌なりと雖も、飜譯すれば、我等をも感奮せしむるものである。是等の讃美歌は、元來小集會の必要に因て、作製せられたものである。ルーテルは、ウッテンベルヒの牧師として就任した時に、其教會員が、昔の讃美歌では、福音の實驗を現はすことが出來ぬといふことを悟り、いまだ嘗て詩句を作つたことのないにも拘はらず、自ら此等不滅の聖歌を作り出したのである。教會の存する限り、うたはるべき讃美歌を作つた他の作歌者の例を擧げやう。

アイザクワッツなる人は、南方英國に於ける一小組合教會の青年であつた。此の教會で用ゐて居つた讃美歌の多數は、ツマラない歌であつた。ワッツ此事を呟いたために、よりよき歌を作る樣に要求された。これが彼の長い讃美歌集、即ち其内には『昔より代々の我が

たすけよ』、『あやにかしこしや、我神のみいづ』、又は『さかえの君の十字架を見れば』（日本讃美歌、四十九、四十四、八十四）等の含まれたる讃美歌集の出來た起源である。一層現代に近き二個の例を引かう。チャルマーズの貧民救濟の盛大なる組織は、彼がグラスゴーに牧師奉職中、其の管下の貧民の間に於ける勞役を觀察した、それより生じ來つたものである。又た我が國語の模範たるニュマンの説教集は、彼れが日常の收會事業中に、書かれたものである。就中、最も優秀なる説教の多數は、下層社會の聽衆に對して、午後の集會に於て、

なされたものであるといふ事である。

殆んど、手當り次第に、擧げ來つた例證の外に、多くは敎會者流にあらざる所の、例へばウォーヅヲルス、カーライル、ブラウニング、乃至ラスキンと稱するが如き偉人の證言を加へやう。彼等は小敎會の會員たること、若くは役者たることの尊貴に對する證言を書き殘して居る。カーライルは、兒童の時、兩親に伴はれ行きしダムフリース、シャイアの小敎會のことに就いて、千八百十六年、次の如く記して居る。『思ひ返せば、彼の年老いたる分離敎會の牧師たちは、余に取りて、今は甚だ尊いのである。余が兒童たりし時に、彼等の多くは、白髮の老人であつた。近代の衣服をまとふては居れども、彼等ほ

どに、古の福音宣傳者に似たるもの、又た彼等ほど、基督に仕へたる貧しき學者紳士に似たるものには、世界の何處の新敎、及び舊敎の牧師の中に於ても、邂逅することが出來なかつた。余が兒童の時の彼の隣の會堂は、其時代に存して居つた最大なる伽藍よりも、余に取りては、猶ほ神聖である。あの會堂よりも、猶ほ粗末で、質朴で、田舍風のものは、何處にもない。けれども、其會堂には神聖なる焰があつた。權威ある焰の舌があつた。依つて以て、未だ人の心より失せ去らぬ、最良の部分に點火したのであると。ブラウニングは、其著『クリスマスイーブ』に於て、始め厭ひ捨てた見すぼらしき敎會に歸り來つて、次の如く言うて居る。『愚なる弱き我は、神の助けによりて、かく考へ

た。即ち地に就ける助力を、全く棄てゝ、最も薄き人間の幕を用ゐて、神の御姿を、最も明かに拜する其種の禮拜法を、最も我心に叶へるものなりと、柔和に受け入れんことを大に力むべしと。……寶を保つ土器の庇か、成る可く少いといふとは、望ましきことである。寶は假令黄金の瓶の中にても、同樣に安全に保たれるのみである。何よりも、重大なる事は、其器か充分なる分量を保ちて居るか、どうかといふ事である。すべて他の事は、神が直ちに調べて下るのである』と。

最早や、引例を要せないであらう。神かこれまで、平凡なる牧會事業程に、祝福し給へる仕事はあるまい。天才も、此種の必要に應じて、顯現し來つたのである。最も偉大なる人物は、是によりて其性質を訓

練したのである。我等の宗教の最も永遠的なる、最も光榮ある成果は、此種の機會より出來上つたのである。されば、何人たりと雖も、其の宣教の事業中、殆んど、卑賤なる且つ感興なき事業に携はつて居るかの如く、疲れ怠る樣になつたならば、此等の記臆を以て、其腰に帶して立てよ。必ず新しき力と歡喜と、新らしき向上心と、祈禱の精神が與へられる。かくて、終に其の仕事を讃美し、謳歌する樣になるであらう。

井の水よ、湧きあがれ。汝等これに歌ひ返せよ。
此井は、笏と杖とをもて、牧伯等これを堀り、
民の君長等これを堀れり。

雲霞の如く、多數の立證者あることを、自覺するのみならず。特に、次の事を、記憶せねばならぬ。即ち、我等が仕ふる所の敎會は、基督の血を以て購ひ給ひ、其の盤石の上に建立し、且つ『二人或は三人集れる處に、我も共に其内にあるなり』とのたまふ所のものであると。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

神わざに、磽地とも化る人ごゝろ
みづ湧きかへり、歌ひかへらむ

譯者

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

ギデオンの譽と解脫（上編）

茲に、エホバの使者來りて、アビエセル人ヨアシの所有にかゝる、オフラの樫の樹のしたに座す。時に、ヨアシの子、ギデオン、ミデアン人に奪はれざらんがために、酒搾のなかに麥を打ち居りたりしか、エホバの使者、之に示現して、汝剛勇の大丈夫よ、エホバ汝と俱に在ます、といひたれば、ギデオン之に云ひけるは、嗚呼、吾が主よ、若し、エホバ我とともに在ますば、何のゆへに、これらの事、われらの上に及びたるや。われらの先祖か、エホバはわれらをエジプトよりのぼらしめたまひしにあらずや、といひて、我れらに告げたりし、其のもろもろの不思議なる行爲は、何處にあるや。今や、エホバはわれらを棄てゝ、ミデアン人の手に付し給へり。エホバ、之をかへりみて、言ひ給ひけるは、汝この汝の力をもて行き、ミデアン人の手よりイスラエルを救ひいだすべし、われ汝を遣はすにあらずや。ギデオン之にいひけるは、嗚呼、主よ、われ何をもつてか、イスラエルを救ふべき。視よ、わが家は、マナセの内のいとも弱き者、われは、また父の家のいとも卑しき者なり。エホバ、之に言ひ給ひけるは、われ、必らず、汝とともに在らん。汝は一人を擊つが如

くに、ミデアン人を擊つことを得ん。　（士師記、六章、十一節――十六節）

或る記者は、ギデオンの物語は、其の力と其の美とに於て、ギリシャの叙事詩中の挿説と同一味のものである、と云つて居る。文學として、よし、之に如何なる珍重を拂ふにしても、我等は其の道德的實質を拒絶することはできぬ。此の物語の内には、我等多數のものの理性・若しは、良心の容易に享容ることの出來ない、或る事柄がある。けれども、其處に、一個の人物が、躍如として現れ動いて居るものがある。遠き古の種々の妙不思議な事柄の内に、實際一人の人間が、如何にも、丈夫らしく前進して居るのが見へるのである。彼れは神より遣はされて、如何なる時代にも、神の御用を勤む

るに、欠く可からざる精神を以て、當代の要求の事業を成就して居る。ギデオン彼れ自身は、實に十分眞實にして强健、且つ活力ある人間であつて、優に其の物語の難解を打消すに足るのである。神よ、願くば、鈍ぶれ果てたる我等の生活を、鼓舞作興して、ギデオンの歩調に合致せしめ玉へ、又た、希くは、彼の高臺にまで昇らしめ玉へ。

（一）

ギデオンは、全く、其の民族の希望の消え失せし時代の人物であつた。彼れの民族は、恐らく、神が怠慢なる文明國民を懲戒せんがために、沙漠の内に養ひ玉ひし、其の一種族によりて、蹂躙せられてあつた。中には、善良なる蠻族があつて、其の進擊を受けるのが、

却つて其の土地の幸福である樣な事もあつた。彼等は其の押領した文明國民よりも、其の土地に對して、一層有利な乳母であつたのである。然し乍ら、ラアビヤ半島が、其の西方、及び北方の沃地に送り出した、放逸なる遊牧の民等は、概ね然うでなかつたのである。彼等は定住と耕作との能力を欠乏して居たのである。彼等は廢潰荒毀の外は、何物をも、もたらし來らない。野を荒らし、森を伐り、而して其の幾度となき襲擊は、市民生活を不可能に歸せしむるのである。

イスラエルは、七年間も、此種不斷の侵擊に、痛くも、苦しめられたのである。其の侵擊は、始めに、ヨルダンの流を横斷して、エスドレロンに流れ込み、年毎に、進み進みて、終に、南の方、山地にまで達したのである。マナセとエフライムの中部にては、農夫等は、漸々收穫を得ることとか、中々困難になり來つた事を解した。村々は、見捨てられんとして居る。人々は、アラビヤ人の襲擊を避けんがために、洞穴に去つて、其の家族及び穀物を隱匿して居るのである。是は如何なる社會に對しても、一打擊であつたに相違ないが、イスラエルに對しては、最も恐怖す可き突擊であつた。

イスラエルの民族は、地上はた海上に於て、幾度も神妙不思議な默示を受け、神御自身の靈手に導かれて、今の土地に來たことを知つて居る。幾とした幾とした、彼等は其の土地に定住して居て、

文明進歩の本能を感じて居る。彼等は其の周圍の種族に、秀然として居ることを、チャンと自覺して居る、意識して居る。彼等とても、隣邦の種族の如くに、小種族の漠然たる一同盟に過ぎなかつた。然れども、同一の神に對する彼等の信仰歸命は、各々の小種族を契合して、以て彼等に國民的意識を與へたのである。彼等の宗教は、特に、デボラの指導の下に、愛國心と、鍛練、及び献身との義務を教へたのである。其の神の性質よりして、正義が強振せられ、優雅と忍辱とが例示せられた。且つ又た朧げながらも、十分實現するには、猶ほ數世紀を要する、同民族以外の者にも、心つくさん一種の仁俠的本能が、既に彼等の内に生動して居たのである。然るに、今や彼等

は斯の如き地位よりして、最も蠢愚なる、而して最も放逸なる野蠻人によりて、引きずり墮されたのである。其の野蠻人は、彼等に何等をも教へず、又た何等の教訓をも與へぬ。唯だ、彼等をして、藝術も、思索も、はた希望も不可能にして、無氣力なる、而かも驅逐せらるゝ洞穴住民の狀態に歸せしむるのみである。國は地に踏み付けられ、人は匍ふ蟲となる。世にかくばかり、慘ましき出來事があらうか。然し、神は其の僕を遣はして、之を救濟し給ふのである。

（二）

斯くも、慘ましき當代の無理な疾痛を感したのみならず、之が爲めに、種々の疑問を簇生して、疲勞し、且つ煩悶に咽んで居る所の

ものを、神が選び給ひしといふは、注意すべき事である。神は屢々疑惑を抱く者を選んで、其の最高事業を委托し給ふのである。イザヤ若くはパウロの如く、唯一度び、其の疑問の解答を付けて、直ちに神の招喚に隨應し奉る大人物は、甚だ稀有の事である。實際大人君士の多數は、自分自身を疑ふ人である。モーゼも、エレミヤも、自己の不適任を感じて逡巡したのである。『汝の僕は語る事を知らず、我は小兒なり』。ギデオンも、亦た自己の不肖にして、價値なき徒なるを解知して居つた。『あゝ、主よ、我れ何を以てか、イスラエルを救ふべき。視よ、わが家はマナルのうちの最も弱き者なり、我はまた父の家の最も卑賤しき者なり。』然し、是は第二の疑惑であ

つた。彼はなほ未だ、第一の疑問を抱懷して居つたのである。彼れは單に自己について、不安を感じたばかりでなしに、其の國民に就ひても、又た神の全目的につひても、疑つて居つた。『あゝ、吾が主よ、エホバ我等と共にいまさば、などて、是等のこと、われらの上に及ひたるや。われらの先祖が、エホバは、我等をエジプトより救ひ上げ給ひしにあらずや、といひて、我等に告げたりし、そのもろもろの不思議なる行爲は、何處にありや、今はエホバ我らをすてゝ、ミデアン人の手に付け給へりと』。非常なる煩悶である。あらゆる希望の網が、打ち絶たれたるが如き感じがするのである。

さりながら、此物語の内に、皎々として輝く力ある教訓がある、そ

れは次の如である。即ち、全く希望の光明失せ行く程の暗黑なく、又如何に深き淵に沈溺して居ても、神は之を引導し、救ひ上げて、信仰と力との人たらしめ給はぬ事はない、といふことである。我等は——今日の我等は、實に此の教訓を必要とする。今日の最も善良なる青年の多數か、其の成人期に入るに及んで、逢着する疑問は、實に這般の種類のものである。ギデオンの言葉は、現代に強大なる反響を與へて居る。奇跡の時代が過ぎ去つた、といふ今日の絶叫は、丁度ギデオンの叫喚であつた。先祖たちの勇猛精進なる信仰と、希望とを以て、不斷に行動するが如きは、到底不可能である、といふ現代の失望は、丁度ギデオンの失望であつた。我等を取り卷く神の現在と、

其の引導に對する信仰の欠乏は、等しくギデオンの感じた所であつた。あゝ、吾か同胞よ、如何なる程度に於て、斯種の感情が、諸君を突襲し來たるとも、そは斷じて新なる者ではない、又た不治のものでもない、といふことを記憶せよ。多くの人々か、此の類の疑問に因りて、訓練されたのである。且つ其の疑問を、超然脫して、大に國民の威信を光揚喚發した程の決行力、活動力を得たのである。

元來、此の世にありて、神の事業をなさんとするものは、誰人でも或種の疑惑を感ずべきである。何となれば、正直なる疑惑は、常に思考力と同情心とを意味するからである。思ふに、神と雖も、思考の力も、同情の念もなき人間よりしては、到底大した人間を造り

給ふことは出來まい。然し單に推理より起り來る學究的疑問は、同一源泉より涌出する信仰と、等しく共に非である。實際問題に關係しない所の單なる知力的不安心や、良心や、敬虔の念の弛漫したる放埒な自由は、何等の役にも立たないのである。然しながら、人生の重荷社會の前途に横はる夥多しき勞役、乃至は連續ざまに增大するが如く見ゆる、此の世の惡業と苦痛とに對して、一見無頓着にして、且つ沈默なる宇宙の最高力より生起る懷疑は、よし、如何ほど、慘憺を極めても、矢張り、そは神か從來使用し給ふたる所の、又た將來使用し給ふ所の懷疑である。神の白日は、懷疑の暗夜より光昇し來るものである。而して懷疑は、雄健なる自信ある處世の訓練

であり、又た洗禮である。

（三）

如何にして、ギデオンは、其疑問に打ち勝ちしかといふに、全く神の人格的感化力の壓迫に、因緣して居るのである。疑問は、いつも、かくして、超勝の旗を擧げるのである。聖書の中には、深刻なる懷疑者の物語がある。始めは、人生に於ける種々なる經驗の錯綜せる疑問に、心、麻の如く、亂れて居る人々が、直ちに自在と活動との生涯に移つて居る。而して此の變化は、彼等懷疑者が、其の疑問の解答を獲得したるより起つたのではない。聖書には、不思議にも、其の提出せる疑問の解答に關する議論が、少なくない。彼等は全能者の人

格的現存と神恩とに感奮して、其の負擔を承認したのである。モーゼ及びエレミヤが、神の負托せしめ給ひし仕事に對して、果して適當であるか、どうであるか、との疑惑を、神に訴へたにしても、神は彼等に其の誤れる事を語り給はぬのである。又た其事に關して、少しも彼等と議論し給はぬのである。神は、單に、御手を彼等の上に置きて、愛撫し給ふのみである。即ち彼等の心情と良心との上に、神の意志が壓迫して來るといふと、見よ、彼等は既に起立つて、其事業に向つて、用意して居るのである。ヨブがその心を荒らし、且つ其可憐なる肉體を、毀いた多くの疑問に對して、神に訴ふると、神は殆んど其の何れの疑問にも、解答を與へ給はぬのである。否な、

寧ろ、全く應答を與へ玉はぬ。唯だ、自ら、其の全能力の内に宗權を光顯し給ふて、それを以て、ヨブのあらゆる疑問を、鎭壓し給ふのである。ギデオンの物語の美はしき詩は、同一の經過を、一層天眞、素撲、幼稚なる形式に寫したる者である。ギデオンは『或人』に出つくはせた。始めは、同人同朋の如く、其人に談じかける。自分自身に關し、其の國民に關し、また神に關する疑問を語る。處が、其の對手は、一向に、彼れと議論を試みず、又た其疑問には、解答しやうともしない。しかるに、ギデオンは、漸々に、神と相對して居る事に氣がつく、而して神の命令に依つて、彼れの疑問は、啞然として沈默となり終るのである。且つ神の御手の下に、其の微弱にして不適當

である、といふ感じが、消滅して仕舞ふのである。

同様にして、現今の人々も、また其疑惑より起る躊躇憂懼を、罷脱する事が出來る。元來、明瞭にして、且つ確定せる一生の方針を、打ち立つるのは、種々思ひ惑ふ所の問題の解答を獲得することに因らないのである。多くの疑問は、終まて答へられずにあるであろう、多くの疑問は、解答するに値せぬことを感ずるに至るであらう、且つ最も主要なる疑問と雖も、品性及び實際生活とは、全く沒交渉であるのであらう。吾等をして、自在にして、偉大なる生涯に、適應せしむる者は、一種一實の人格者の力である。我等の要する者は、解答にあらずして、召喚である。疑問に對する種々なる解答を

了得するよりも、意志の隨順によりて、我等を光明と力とに引導する所の者、即ち靈力に從順なることか必要である。

かるが故に、青年時代にして、空しく、徒らに、斯種の懷疑に過ごさしめてはならぬ。其内には、懷疑は、自然に、法爾として、解けて來る者である。寧ろ、次の如き大疑問を提出するとに、心掛けよ。即ち、われ神に何事を負ふや、神は此世に在まして、われに對し、何の要求を有し玉ふや、又た今の如く、弱くして汚れ果てたるものは、如何ばかり、神を必要とするかといふことである。青年時代には、懷疑の解答か、必らず得らるゝ如く信ずるけれども、そは常に與へられないのである。前にも述べた如く、或る疑問は、決して其の解答か得

られないものである。或る疑問は、年の經過すると共に、忘却して仕舞ふのである。然し、神はキリスト、イエスに在まして、常に我等に、甚だ近觸して居らせらるるのである。經驗を積むに從つて、神の意志の逼迫を要せぬ樣なとなく、寧ろ、益々、其眞實にして、欠く可からざることを、感得するに至るであろう。『神よ、願くは、汝を助けて、人生とは、神の吾人に對する御旨如何ん』、といふ大なる道德的疑問に外ならぬことを感せしめよ。汝か之を感ずること、痛切なれば、痛切なるだけ、神の御答か近づき來る。且つ、益々、豐かに神の恩惠を與へ玉ふて、汝自身及び他人の爲めに、其の解答を實現せしめ給ふのである。

（四）

次に、神の幻像か、ギデオンに光顯した場所について、學ぶ可きことがある。マナセの中部の谷間では、ヘブライの農夫は、まだ少量の穀物を耕作し、且つ收穫するとか出來たかの如く思はれる。けれども、平時の打禾場にては、其の穀物の穗を打ち落す事か出來なかつた。打采場は風當りのよい高地で、而して、それが遠方より能く見えるからである。キデオンは、斯の如き打禾場で、其の穀物を打てば、必ずアラビヤの襲擊者の注意を引くといふので、少量の收穫をば、酒搾の中に入れて、打禾槌を廻はすことも出來ぬ程の狹い所で、苦しみなから、靜づ靜づと、其の穀物を打つて居つた。

これは極端なる不利の境遇にあつて、心は疑惑のために嚙り付かれながらも、猶ほ丈夫らしく、自分に殘されたる一個の義務を、果行しつゝある所の人の繪畫である。神か此のますら武夫を見出し玉ふたのは、實に塵埃の中に、密閉されたる大氣の中に於てであつた。此處に、彼か疑惑と共に、麥の穗を打ちて居つた時、神は彼に光顯し給ふたのである。而して、今迄、閉ぢられて居た勝利の未來か、展開して來たのである。即ち光線と塵埃とか、爭ひ狂ふて居る狹い場所に、勝利の未來か、開いて來たのである。

こは是れ、神か何人たるを問はず、金輪際の力を盡して、仕事を遂行する人に、光現し給ふのである、といふ大御訓である。『ますら武

夫よ、エホバは汝と在ます』、といふ大なる叫びは、冒險を以て、其の敵に對した者等の一人に向つてでなく、頑然其の場合に於て、成し得るる唯一の仕事をなした所の、此の困難せる、疑惑せる農夫の耳に達したのである。而して神か彼に語り給ひし其の御言が、明かに顯證する如く、彼れこそ、眞の勇者である。

利害關係の爲めに、宗教的信仰に累を及ぼさぬものは、甚た希有である。自己の運命や、機會に對する不滿足は、世界を救はんとの神の力と、好意との關する高尚なる問題を、常も攪亂し勝ちである。われらは時折り、神及び神の道に對する疑問の中より、最も無用なる疑問に、陷込むべき利己的思慮を發見して、之を打消さねばならぬ。

詩篇、七十三篇の記者かいつた。『わか心はうれへ、わか腎はさゝれたり。われ愚かにして知覺なし、聖前に在りて獸に等しかりき』と。我等は、我等の抱懷する種々なる疑問より、個人的野心と、他人より受けたる非行、乃至境遇の不滿等の諸念を、悉く抽出し、頑として排斥しなければならぬ。斯くて、始めて、我等の疑問は、優に聖靈の御働きを受くるに足るだけに、純潔となるのである。吾等にして、若し光明を得んと欲せば、先つ其の持てるものを取り居る所に働き、且つ最も手近なる義務を果さねばならぬ。道德を嘲ること、傲慢なること、短氣なる事等の如きは、神の救助、神の守護を寵授し給ふ性質ではないのである。神が向上せしめし給ふ人々は、其

の居る所の場所に、又た其所有するだけの光明に安んじて、執然として、自己の義務を果たす人々である。神は我等が想像するが如く、天下の廣居に於いて、我等に來り給はずして、寧ろ神御自身が、我等を置き給ひし場所、即ち日常生活の塵埃と喧囂との中に於て、我等に顯現し給ふのである。これ神が其の英雄、其の大丈夫を造り給ふ道である。諸君が希望の綱を失つて、心張り裂くばかりの恩をなす爲めに、諸君の神が嚴酷なる方である爲めに、人生の事業が、信仰を無効ならしむる爲めに、又た神の我等に托し給へる多くの秘密が、確信ある活動、及び長時間の希望を不可能ならしめたために、不平を感ずる其時、(時には、誰れとても、不平を感ずる)諸君は、諸君の内

にある、あらゆる力を傾注して獅子奮迅せよ、諸君の手に相應する仕事を試みよ、喧騒なる紡績會社に於けるデヴィド、リビングストンを見よ、彼は大學教育の初歩を學んだのみにして、偉大たる經歴に船出したのである。ギデオンを見よ、彼れは疑惑及び不幸の爲めに、痛苦を嘗めつゝも、勇敢に、頑固に、金輪際の力を盡して、心を注ひでなしたゆへに、神彼に來りて、英雄と叫び給ふたのである。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

ひとすぢに神の生命に、をだちなは、
神の武雄と、とわに、ほまれも。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

譯者

ギデオン（下編）

その夜、エホバ、ギデオン曰ひたまいけるは、起よ、下りて敵の陣營に入る可べし。われ之を汝の手に付すなり。されど、汝下ることを恐怖しなば、汝の僕フラを伴ひ陣、所に下りて、彼等のいふ所を聞く可し。然せば汝の手強くなりて、汝敵陣に下ることを得んと。ギデオン、すなはち僕フラと俱に下りて、陣中にある隊伍のほとりに至れり。

（士師記、七章、九節――十一章）

前回の説教に於て述べたる如く、ギデオンが、其の疑惑に打ち勝つや、彼れの一生の大戰場に通ずる一條の道路が、打ち開かれたとはいへ、彼れは直ちに其の道へ走り行つた、と想像してはならない。神が彼れを見出し給ふた時は、收穫期であつたからして、次回のミデアン人の擊侵前に、イスラエルの各族を、戰に召集するには、數ケ月

を要したのであらう。再びアラビヤの蠻族が、ヨルダンの流を渡りて、草は綠に、穀物は穰々と、豐かに實れる西部パレスチナの地に進入せる時、ギデオンは數千の人々を率ゐて、エズレルの谷間に進軍し來つたといふことである。

（一）

ギデオンが率ゐておつた所のものは、軍隊にあらずして、單に烏合の衆であつた。士師記の他の部分（士師記、三章、三十一節、五章、八節。撒母耳、上、十三章、十九節及び三十二節、參照）が、當代のアスラエル人に就いて、嘆息して居るが如く、適當なる武器の欠乏といふが如きは、眞個の困難でなかはつた。眞個の困難は、軍用品な

どの外的、物質的の方面でなくして、精神の點に在つたのである。ギデオンの率ゐておる數千の人々は、宗教の名によりて召集せられた者であつたが、今や敵前に於て、其の熱心が試驗されねばならなかつた。東洋流の戰爭に、屢々用ひらるゝ所の一種の巧妙なる兵法、即ちギデオンが採用せんとした所の兵法には、そんなに澤山の戰爭者を要しなかつたのである。其の兵法なるものは、少數の決心隊が、晏如として、敵軍の眠れる所に突擊し、以て大恐慌を惹起せしめる方法である。かるが故に、第一に嚴酷なる戰場の實狀に堪へ得ざるが如き信仰のともがらを、陶汰する必要があつたのである。此種のやからは、眼下の平野に敵の軍勢を見ては、考へ來りし空想を悉

く消失して仕舞つたのである。『誰でも懼れ慄くものは歸り去るべし』。斯くて大多數は歸り去つた。『また地うすき磽地に遺せし種子あり、直ちに萠え出てたれど、日の出てし時、灼かれしかば、根なきが故に枯れたり』(馬太傳、十三章、五節、六節)

第二回の陶汰の意味は、甚だ不明である。然しながら、苟くも、無意味でない以上は、次の如く説明したらよかろう。ヘブライの軍勢が、到達して居る山地と、ミデアン隊が、駐屯して居る下手の平野との間には泉があり、池があり、又は盧荻の密生せる水路がある。ギデオンは神の命によりて、平野の水際に下りて、渴ける者等に水を飲ましめ、彼等が敵前に於て、如何なる態度を以て、其の渴を醫すか

を試檢したのである。そこで、或者は、犬の飲むが如くに、始んど姿勢を亂さずして、水を飲だ。けれども、他の者は膝を折り、身を屈めて飲だのである。如何なる批判的理論を以てするも、此の試みが、全く無意義の者にあらずとする以上、兩者はそうでなければならぬ。前者は敵が近傍に軍して居る事、殊に其の前衞の伏兵が、葦間の中に潛んでは居ないかと思つて、殆んと立姿の儘にて、大急ぎに飲むだ。即ち警戒を怠らなかつたのである。之に反して、後者は眼前の敵をも忘れ、傍若無人に極めて呑氣に、然かも直ちに慌てふためくが如き態度で飲んだのである。斯かる試驗法は、確かに東洋人の考に適當したものである。

以上の説明が正當とすれば、これは何れの時代に於ても、神の召喚に應じて、其の高尚なる目的の爲めに働き、若しくは戰ふ所の人々の間の大なる區別を示すものである。彼等は敵に對して如何なる態度を採るか、敵に對する如何なる考が、其態度を定めるか、戰ふ可き罪惡の眼前に於て、彼等は如何にして必要なる休養劑を用ふるか、食物、休養、財産、快樂等も、唯だ事業の爲めにのみ用ゐて、苟も訓練愼戒を怠らざるか、或は單に快樂を貪るの餘り、神の御招喚の目的を忘れて、揚氣にして居るか。(こんな人間は、何かの事あれば、直ちに周章狼狽するのである)

前に述へし此の物語りの説明が、正しからうが、はた正しかるまいが、兎も角、以上列擧し來れる質問は、基督の王國に入れる我等に取りては、正直にして、且つ自問すべき必要があるのである。『かれ道のほとりの川より汲みて飲み、かくてかうべを擧げん』(詩篇、百十篇、七節)事業即ち戰鬪は、神の我等に命じ給ひしものである。神が我等の爲めに、撒いて下さつた祝福は、事業に對する適當なる恭敬心を以て用ゐねばならぬ。事業に對して戒愼を怠り、力を潰すが如き横着をしてはならぬ。

ギデオンの軍隊の選擇の方法に比較して、少しく、クロンウエルが、內亂の前夜、其の鐵壁隊を徵集した事を見よう。クロンウエルのやり方も、ギデオンのやり方と毫も異る所はない。彼は、幾度も幾度

も、其の應募者を淘汰したのである。力量若くは戰鬪の經驗、殊に社會的地位等は、少しも考へず、唯だ神を畏れる者等を選拔して、多數の義勇兵を歸り去らしめた。クロンウエルは、いつも、其の軍隊を呼ぶに、我等の一掬みの（軍隊）といつた。人ありて、彼が新兵を補充することに就て、甚だ苛酷なる事を詰責した時に、彼は答へて曰つた。『自分は、君等が紳士と呼んで居ながら、而かも、何等の役に立たない者よりも、寧ろ戰ふ目的を知り、且つ其知れる所を愛する赤褐色の上着を衣て居る所の素樸なる士官を望む』と。『戰ふ目的を知り、且つ其の知る所を愛するもの』とは、眞正なる兵士に對する、何たる好個の定義ぞ。此のクロンウエルの戰つた大戰爭の事情、及び

原因等は、何人も了解し、又た想像する事が出來なかつた。何となれば、そは精神的にして複雜、且つ判斷力と敏銳なる良心とを要したからである。國旗もなければ、祖先來の仇敵といふ譯にもあらず、又た別に愛國心なども顯はれて居ないのである。吾人の戰鬪は、正に寸毫も、之と相異する所はない。我等は我等の心を亂す幾多の道德問題に遭遇するのである。先に述べた大同題ではなけれども、此等の諸種の疑問のために熱狂するのである。其等の疑問の內には、無邪氣なる適當なる、寧ろ必要なるものが甚だ多いけれども、動もすれば、我等の輕率なる心情が、其がために奪はれて、肝要なる人生の大目的を忘却するのである。神よ、願くは、我等爾の敎會に連

り、戰ふ目的を知り、且つ其の知る所を愛する我等をして、飲食や、快樂や、はた富の慾望を、超然解脱する所あらしめ給へ。

（二）

さて、長時間の準備、今や整頓して、三百人のものが選拔せられた。斯くまでも注意して、人間の傲慢が除去せられたからには、直ちに奇蹟的の勝利が生起するが如く吾人は思ふのである。然るに、此の物語は、普通の東方戰爭の如き徐々たる、又た錯然込み入たる成行を語るのみである。唯だ一つ超自然とも稱すべきは、神の御引導に對する信仰が、兵士の間に充溢して居ることである。一方の軍隊が、冒險を試み、戰術を應用するが故に、他方では、頻りに驚愕し、狼狽

して居るのである。

甚だ靜かに、新なる突進の事業が語られて居る。ギデオンが三百人を選拔した夜、神は彼れに曰ひ給うた。『起てよ、下りて敵陣に入る可し。我れ之を汝の手に付すなり』と。好機逸す可からず。神の手、ギデオンの上に下れるからには、一突擊の下に、半時間も經ずして、勝利は彼の掌に落つべきである。然し彼れが、猶ほ逡巡したるためか、それとも神は彼れが、更にインスピレーションを必要とする事を知り給ふたからであるか、神は更に語をついで告げ給ふた。『されど、汝若し下る事を怖れなば』、即ち全軍と共に冒險の途に上ることを怖れるならば、先づ、「汝の僕フラを伴ひ行きて」偵察せよ。

而して『彼等のいふ所を聞く可し、然せば汝の手強くなりて』三百人と共に『汝敵陣に下る事を得ん』と。

即ち始めより全軍か、其の信仰力に依りて進撃せずして、先づ二人の者が、叢地より叢地へと、注意深く、暗黑中の道を拾ひ歩きして、平野の彼方、ミデアン軍の篝火、微かに見える所まで行つたのである。勇奮せる全軍の突撃ではない。三百人が口口に勝利を叫ぶのでもない。唯だ此の冒險の主腦なるギデオンが、獨り息をこらして居るのである。彼れは自己の安危が樹枝を折りて、火を焚くアラビヤ守兵の掌中にある事を感じて居る。夕方、始めてのインスピレーションに充たされ、一擊にして勝利を得べし、との神の約束を穫得せ

し時のギデオンと、今は自己の生命も、其の委托せられたる天幕も、唯だ敵の守兵が樹枝を折ること、即ち明滅せる篝火の如何んにより て、其の運命の決定することを知りつゝ、障害物に身を隱匿しつ、匍匐して行くギデヤンとを比較して見よ。ミデアン軍營の陣頭に立つて、半睡半醒なる番兵は、足以て火中に弄り入れて居る木片を蹴飛して、五尺も離れたる闇を照らす樣な元氣を有つて居るであろうか。若しそういふ事をすれば、ギデオンは見付つて仕舞ふのである。之れは理想より現實に降る不可思議である。大人物は固より、平凡なる神の兵卒と雖も、之と同樣なる經驗を通過しなかつた者は、殆んどないと思ふ。始めは神の御引導を感じて、直ちにても勝利するか

の加く確信するけれども、神の召喚し給ひし豫想其儘の地位に到達せんとするには、中々不安なる道程を辿り行かねばならぬ。再びクロンウエルを例に引用して説明しよう。彼れの軍人的生涯の初期に於ては、彼れは確かに神によりて、直ちに勝利の與へらるゝ事を感ずべき機會があつたのである。然しながら、彼れは、同時に軍用物の困難に苦しめられた。或は二十挺の小銃が不足し、六着の軍服が不足した。或は其の支拂殘金を官廳より受取らしむる爲めに、手紙を認め、或は同僚士官の爭論を鎮定する事などをせねばならなかつたのである。

我等とてもそうである。吾等の事業が、特に神の命じ給ひし大事

業にしても、或は單に品性の修養に外ならぬにしても、それは論ずる所ではない。ギデオンが、始めに遭遇した如き、不思議は、確かに我等にも來る。即ち神の言葉のインスピレーションは、我等の衷心にも起るのである。大なる希望が達せらるゝとか、又は道德上の勝利と平和が、直ちに可能であるとかいふ確信は、我等にも起るのである。けれども、固より之が爲めに、境遇や、事情に關する知識を、無視してはならぬ。矢張、苦しさ、危さ仕事を、敢てせねばならぬ事もあるのである。暗中自己の微弱なる感に襲はれては、僅かに數時間前、力强く聞いたる神の御聲のあるに拘はらず、恰かもギデオンが、彼の夜、エスドレオンに於いて、樹枝を折るゝことと篝火の明

滅とに、息をこらした如く、自己の使命、若くは、自己の品性の成敗は、一に、極めて、些細なる事柄に係ることを感ずるのである。苟も、諸君が、神のために、事業に從事するならば、神は決して勝利の約束なしに、其の事業を諸君に命じ給はぬ。且つ神は手づから確信の洗禮を光施して、諸君をしてさ、ながら一擧して、直ちに成効することの出來る如く感ぜしめ給でのである。然し、餘りに、其事に信賴し過ぎてはならぬ。無論、其事は眞實である。諸君を力づける爲めに施與せられたるものである。けれども、何か双肩に翼が生へて、今後の生涯は、唯だ一と飛であるが如くに思つてはならぬのである。さりとて、間もなく、危險なる不案内の道を苦しみ辿りて、義

務を遂行せねばならぬ樣な事があつても、失望する勿れ。勝利は確實である。けれども、先づ其の境遇を領解せなければならぬ。敵軍を了解せねばならぬ。又た斥候となりて、緩漫不活潑なる仕事もせなければならぬ。斯くて、始めて、脊後の軍勢を指導指揮して、約束の勝利を奏する事が出來る。

神が我等を感奮せしめ給ふは、品性を完成せしめんが爲めであらう。神の感奮せしめ給はぬ何人があるか。神の靈が地上に於て、成す最も不思議なる奇蹟を、いまだ感じないものがあるか。——最も、神妙不思議なる奇跡とは、多くの道德上の戰場に於て耻かしめられ、且つ無能にされたる憐む可き罪人にして、猶ほ清き心、及び神意を

成す勇氣が可能であるといふ確信である。確かに、我等各々は、斯種の信仰の事を辨へて居る。ギデオンの神に依つて曰ふが、斯の如き確信の瞬間が消え失せて、全く別樣に感ぜらるゝ長き不愉快なる時期が來ても、決して失望してはならぬ。即ち眠れる誘惑が、何時しか醒まして、我等に飛び付くかも知らぬ、といふが如き場所を通過して、極めて緩慢なる進歩をなし、而して全品性が危地に臨むが如きことあつても、決して失望してはならぬ。されば、我等の義務は、單に警戒を怠らずして、徹夜と祈禱とによりて、斥候の任務を成就する事である。神が我等を敵軍の中に送り給ふたのは、我等をして、敵の力を知らしめんためである。若し直ちに目醒めたる誘惑に圍まれて、

道德的狠狽を演じて、多くの人々の如く、良心を失ふか如き事をなさずして、克己心を涵養し、殊に祈禱を以て、周圍の誘惑をして、熟睡に沈ましめる時は、必ずや、我等は勝ち通すことを得べく、且以前の如き、道德上の安心と、力とを取り返す事が出來る。バンヤンの壁喩物語によれば、『順禮者』は、獅子の居る間を通らずしては、『美はしき家』に達する事が出來なかつた。其の獅子は信仰を試みて、其の有無を發見せんが爲めに置かれたのである。『順禮者』は、ギデオンが、ミデアン人の中で、憂慮したるが如くに憂慮したのである。然し彼れは道の中央を通る可き命令に服從し、祈りつ、前進して、終に、其の夜は『平和』といふ部屋に泊り、其の翌朝目さめては、早や天國

に隣に居るか如き感しかするといつて、歌を歌つたのである。

青年諸君よ、反復して言う。決して誘惑の爲めに落膽する勿れ。神は、諸君を、神御自身のために造り、諸君は神の子であり、且つ神は基督に依つて勝利を與ふる事を約束し給うたといふ、眞正なる奇蹟を衷心に實驗するならば、大に其力を固執せよ。苦み喘ぎて誘惑地を通行し、微弱と寂莫とを感する時は、何しか過ぎ去りて、元氣と確實なる勝利の日か、自然に法爾として開け來るのである。

＊　＊　＊

ゆくて闇と悪魔としあるも、いさみゆけ、
妙法の宮殿の門扉ひらけむ。

＊　＊　＊　譯者

善良なるサマリヤ人

彼自を罪なき者にせんとて、イエスに云けるは、我が隣とは誰なる乎。イエス答て曰けるは、或人エレサレムよりエリコに下るとき、强盜に遇へり。强盜その衣服を剝取て、之を打擲き、瀕死になして去りぬ。（路加、十章、二九以下）

此の物語は、久遠の生命に關する質問を以て、議論を戰はせんとするに始まり、路傍に於ける負傷者、油、酒、驢馬、乃至銀二枚を宿屋に支拂ふ事實を以て、終つて居る。予は、敢て、此の物語が、久遠の生命に關する質問に於て始まり、銀二枚の支拂を以て終るといふ。而して吾人は、實に、此間に於て、多大の意義の存じて、以て吾人を法益するものあるを發見するのである。

或法教師あり、――勿論、今日、云ふ所の法律家ではない。宗教上の法律に精通せる學者を意味するのである。而して法教師であれば、なる程難有い人であるわけたが――此法教師が、基督に、二個の質問を試みた。何れも、やかましい理窟張つたものである。扨て、彼は尋ねて云ふ、師よ、永遠の生命を繼承くためには、如何んの事を爲すべきかと。基督は、之に答ふるに、更に、一個の質問を提唱して、汝は汝が其の精通せる律法に於て、何等らか發見せしかと尋ね玉ふた。そこで、法教師は、嘗て、基督が、其内に法律の全體を包含せしめ玉ふた。其の同じ句をば引用した。そこで、キリストは法教師をして、去つて此の律法を實行せしめんとし王ふて、その法律

を實行せよ。かくて、汝は永遠に活く可し、と曰ふた。併し、法教師は、なほも去らなかつた。蓋し、彼は自己が、かくの如き、見易き無用の質問をなした不體裁を、大に恨とし、且つ、彼が折角、此所に來つて、基督に見へた眞の目的を、未だ達することが出來なかつたからである。而して――彼は、此の一語を、大に語勢を強めて云つた。宛乍ら、第一の質問と、此次の質問との間に、非常に重大なる關係を起さんとするかの如く――而して、誰人が余の隣人であるかと。此の質問は、又實に、其者として、一個嚴肅なる質問であつた。此質問は、學校に於て、よく起る議論であり、又た綿密なる人に向つて、日毎の行爲の問題であつた。即ち如何なる人物、及び如何なる

性格の人と、吾人は常に相住來することをうるのであるか。又た律法によりて、命令せられた奉仕を、吾人は何人に向つてなすべきかの問題是れである。然し、此法敎師は、學問上並に實際上の興味を以て、此質問を試みたのではない。物語によれば、法敎師は、吾が基督を誘惑せんとして居つた。基督に議論を吹掛けて、彼をして法律の文句、乃至正統的の意見と、或る脊反したる事を云はしめんとしたのである。基督は諸の人を相友とし、相親好しみ、諸の人を祝福し玉ふた。是れ實に、所謂律法上の隣人の意義を、遙かに超乘したものである。法敎師は基督を誘惑して、其律法上の定義に背反したる言葉を、發せしめんと企てたのである。然るに吾が基督は、

此の企を斥け、獨斷を以て、此質問に答へ給ふ代りに、一個の物語を說法し給ふた。そは彼の敵手のあらゆる一切の偏見を一掃し去つた所のものである。何となれば、此物語の主人公は、其敵手が一個の淚人者と考へた所のものであるばかりでなく、却つて、其法律の支柱を以て目せらるゝ祭司僧侶が、罪を犯すに至つたからである。かくて、此物語は、其法敎師の心胸に徹し、彼の同情を催し、彼をして此に隨傍せしむるに至つた。法敎師は、實に、辱ぢ入つた。併し、『人間』は勝利を得るに至つたのである。

法敎師の問ふ所のものは、一個の定義であつた。而して基督の答へ給ふ所のものは、一個の場合を示すとであつた。

扨て、吾が基督か、如何に、其内にありて、當時の法敎師連が議論しつゝあつた、氣圍氣中より、其全主題を罷脫せしめたかを注意せよ。法敎師連の多數の議論趣味は唯だ、純然たる形式上の宗議論、學究論に過ぎなかつた。會まゝ、優しき良心をもてる實際家ありてすらも、なほ其日毎の行爲か、是等の議論に誤まれて、稍ともすれは、屑々たる形式的のものとなり了せて居つた。只管、抽象的觀念をあげつらひ、衣食、商買に關する小理窟を言合ひ、不淨者の衣服に接觸する勿らんこと等の事をやかましく言ひ、或は死者の意見に關して、役にも立たぬ論爭に日暮らし、或は瑣々屑々たる末葉事までも、根堀り、葉堀りして、强ひて、是が定義を求めんとす、

實に彼等一體の風儀、是れ悉く形式的抽象的にして、煩瑣之極つたのであつた。若し夫れ具體的に活動的なるものとては、只た前の意地惡き質問に見るか如き、此等議論家の辛辣銳利なる氣質のみであつた。そは、宛然、濛々たる煙裡に閃めく劒の如きものであつた。

諸てかゝる一切のものから、基督は超として遠離し、問題を實際生活に轉投せしめ玉ふた。さて那邊に問題は落着くべきであるか。パレスタインに於ける、最も危險なる一條の道路の上に、此主題は落ち止まつたのである。而かも、この路は、亦た最もよく知れ渡つた路であつて、吾が基督に謁見せんとするものは、巡禮者の如く、必ず此路を通行せなければならぬ。さて、人々來つて、此の路

上に於て、旅人の追剝に逢ひ、傷を滿身に負ふを見て、其の由を急ぎ告ぐるや、殿堂や教會に於て、さしもに勇ましくあげつらひ居たりし祭司等の聲々は、俄かに、私語と變ずるに至つた。思ふに、基督の紹介し玉ひし、此知名の危險、亂暴、殘忍なる事實は、拂然として、基督に傾聽し居たる者のあらゆる跨學的の惡意ある思想を一掃し、何れかに、はぐる可かりし同情心を清めて、自ら其胸中に、基督が是より云はんと欲し玉ふものに對する同情心となさしむるに至つたのである。是れは實に吾が基督が、其の創造力を以てなし玉ひし事件の一つである。若し、吾人にして不注意ならば、遂に看過し去るものなるが、而かも是れ一大事にして、實に基督が問題

の全氣圍氣を一變せしめ玉ふた事例の一つである。而して、見よ、吾人の心、亦た此一事によりて、變化するのである。

吾人は、皆な、神か吾人をして足らはぬ人を助けしめんかために、吾人に賦與し玉ひし良心、及ひ同情の念が、如何に容易く、吾人か同情すべき事柄に遭遇する遙か以前に、吾人の思想を先有し居たる外見上都合好き諸種の思考のよりて、蠶食せらるゝかを承知して居るのである。而して吾人は、此關係より見て、宗教其者か一の危險を包藏するものであることを、表白するを禁じ得ないのである。吾人は要らぬ定義を下し、其の修整に齷齪し、無益の議論を列ぶることに忙殺せられて、本來、宗教か獅子吼し、鼓吹せさる可からさ

る本務に關しては、却つて、何等の力をも有せず、又精力を注がざることと勝なるは、蔽ふ可からざる事實である。是の事實は、基督が、諸て當時の僧侶社會の通弊である、と思惟し玉ふたるものであつて、又た彼が慣習的の宗教關係より、超然として、自由に活動せんがために、其主題を實際生活裡に轉投せしめ玉ひし所以である。

今、吾人をして、此物語の性質を説明せしむる前に、先づ、吾人をして、吾が基督が、『隣人の情』の事例として、撰み玉ひし事件の場所に就て、暫時く考察せしめよ。そは家庭でない、亦た寺院でない、乃至市場や、戰場でない。又社會的の愛や、訓練や、愛國心や、儀表的人物の意見の關係し得べき底の如何なる舞臺でもない。

其は道路である。而かも、淋しい索然たるたゞの道路であつて、疲勞と、危險と、暮れ行く薄暮の、互に變る舞臺である。かゝる舞臺に於ては、人は、例へは、家庭に於ける場合、若くは、自己の日常の仕事の舞臺に於ける場合に見るが如き、無私欲の動機の如何なるものをも有せない。多くの倫理學者は云ふ、『旅行、もし汝にして、人の性格を發見せんと欲せば、須からく、其人と共に旅行せよ』と。旅行は、實に、人の性格を、最もよく表顯せしむるものである。而してこの旅行は道路に於て行はる者である。それで斯の如くにして、吾が基督も、亦博愛に對する彼の試を、旅行によりてなし玉ふたのである。彼も亦た、吾等の如く、あらゆる點に於て誘惑せられて、其御足は此

地上の疲勞したる道を歩んだ。而して、彼の心は、社會の制裁、及び温情の中に於ては、博愛なるが如く見ゆる吾人が、一度び旅程に上るや、如何に、屢々無情無責任に陷ふることの事實を、親しく經驗するに至つた。而して是は正しく、旅行に於て、最も利己的に、最も怒りやすく、路傍の難澁者に對して、無情なるものは、各宗派の巡禮者に外ならぬ事實の面白き註釋である。宗教的遊行物語は、是れ一個の鄙吝なる殘忍なる物語である。人類の歷史の頁を、之れ以上に汚したるものはない。今、夫れ、旅行者として、基督は、昔是等の巡禮者の一人に向つて、説法して居たまふたのである。而も、吾人に向つて、一層彼の教訓は、高大である、即ち其はこうである。神が吾人に

要求し玉ふ仕事、及び德の如何に多くが、主として、吾人の私欲、若くは虛榮の念より來たる其等の習慣的報酬、もしくは感念より超然遠離して、實行せられざる可からざることを教ゆるからである。これは實に精進勇猛の行爲である——即ち、そこに、一切吾人の心情の偏癖、もしくは執着を脱して、見てもなく、又た其他の勸奬刺戟もなくして、吾人の本務を實行すると云ふことはかゝる事情の下に、僅かの、もしくは、何等の自然的救助をも有せず、又自己を興奮せしむる何等の刺戟物を有せず、疲勞して、獨り人生の行路をたどらねばならぬ人々は、希くは、自己の歩む道路は、自ら此地上此平原の高臺なることを記憶せよ。彼等の旅程は、常に吾等の主が見守りて忘り

玉はぬ所である。而して、其の間に、キリストは、其の奉仕の理想を發見せんとして居玉ふのである。

吾が基督は、此道路に於て、如何なる人々が、偶然落合ふかを說き玉ふぞや。

一人の頓死者、一人の祭司、一人の僧侶、及び一人のサマリヤの旅人、これてある。彼等の間には、毫も社會的接觸の起り得べき點はない。換言すれば、彼等の間には何等同族の好み、共通の愛國心、若くは信仰と稱し得べきものはない。如何に、基督が、夫れが唯だ單に機會で落合つたといふことを、力籠めて曰ひ玉ふかを見よ。然り、只だ、偶然の機會で落合つたにすぎぬ。然るに、其の可憐の

男は、盜賊の手に落ちた。此所に、偶然に、一人の祭司は來合せ、而して、同樣に、又た一人の僧侶が來かゝり、而して、同樣に、或るサマリヤ人も、旅行し來つて、此所に落合つたのてある。

隣人の情、慈善の一切の形式に於て、如何なる現象か、此所に爆發したか。誰人か吾が隣人なるぞと、法敎師は其の定義を聞かんかために質問した。基督は答へてのたまふ、事實か汝にそれを證明するまで、予は汝に語ること能はず。汝は隣人の獨斷的註解を求め、由りて以て議論を試み、又は獨個の理想を持して以て、私かに滿足せんとするのてある。或は自己の爲に壹個の階級を創め、乃至壹個の團體を形成せんとして居るのてある。然し、予は、只た事實

か、汝の隣人を説明し、又た其隣人に對する汝の義務を明瞭にすべきことを、汝に語らんが爲に來たのである。而るに、若し、汝にして、隣人なるものは、元來、斯の如きものなりとの理論を、先つ心中に畫いて、彼の祭司や、僧侶の如く、事實を捨て、他方に向ひ去らば、汝は眞に憫む可きものであると。

斯の如くにして、此の譬喩は、深刻に吾人の心胸に徹し入るのである。其目的は、むしろ吾人の心に慈悲の感情を起さしめ、或は吾人に、先づ吾が同胞に對する本務の良心を與へんとするものと云ふよりも、却つて、如何に、容易に、這般の感情乃至良心が、外見上の利益のために、荒らさるゝかを、主として吾人に敎へんとするもの

のである。實に此等の利益の或物は、宛然たる宗敎の名を騙り取らんとするものである。そは吾人の慈善の、如何に多くか、空論的に空氣を打ち、而して如何に僅少なるものか、健實なる此の地面を踏むかを、吾人に顯證する所のものである。そは社會の慣習的形式的の規程より超離して、吾人を自由にし、吾人を實際生活の中心に觸れしめ、而して、なほ吾人の愛に、常識、本領、勇猛を加へしめんとするものである。

抑も、吾人の博愛には、三個の欠點がある。

第一、吾人の多數は、實際より離るる傾向を有して居る。議論及談話は、特に其か懶慢放縱なる時に於て、至つて價値少なきもので

あつて、吾人は、往々此等のものに躓り、而して此等に躓り行くに於て、よく諸の實際的救助の叫をば其等議論の妨害と思惟する習慣に陷ふる傾向を有して居る。或宗教民族に於ては、其性情、たとへ路傍に出會ふ危急の事實を見ても、臆して手を下さぬか如き狀態に達つて居るものかある。恰かも、彼等は逸れ馬の如く、是等の事件を看過し去らんとするのてある。最近二十年間に於て、基督教會は、此種の性情を驅除して、驚く可く其面目を改めて來た。而も、尙ほ基督教徒の大部分か、此性情によりて、影響ぜられつゝあるは、遂に拒む可からざる事實てある。而して、吾人が如何に、吾人の宗教の眞理、乃至其信仰箇條に對して、忠實てありとするも、吾人は

尙ほ彼の祭司僧侶の如く、路傍に於て、不意に遭遇する事件に向つて、冷然看過し去らんとする傾向を有するものなるを、記憶する必要がある。吾人は自ら宗教民族を以て、任じて居るの故に、特に此の性情に就て警む可きてある。神に求むるに、唯だ隨順と忠實の念とのみを以てする勿れ。又た勇猛と機敏の心をも、希求すべきてある。蓋し、是等のものゝ欠乏より、今日社會に於ける實際の要求か、充されずに過ごされ居るからてある。

第二、總じて、吾人は理想の內に沈溺する癖を、多少有して居る。こは宗教信者の罪ばかりてはない。又耶蘇を凡人とする主義の人も、同樣てある。天の光明の下に、自己を輝かさんと努むるその側には

地の暗蔭に蔽はれて、伏在する者を、忽諸に附する傾向あるは、之れ、はた、單に吾人基督教徒のみではない。不信者も、亦た這般頑強なる自利心に富んで居る。今日に於て、善く物の解つて居ると稱せらるゝ人は、明瞭なる觀念と、博愛の事項に於ける明白なる方式とを以て、滿足して居る。彼等は決して成効すべき智的努力の範圍を越えてもがかず、又た明白なる感情を以て滿足して居る。人は此等のものを呼んで、實理主義者、世俗の社會主義者、宗教的形式主義者、乃至隱遁主義者等と稱するのである。機敏にして、精練せられた る心情を有する彼等は、哲學乃至文學の内に、表明せられたる社會の正義と安寧の新風光を歡迎する。毎週、彼等は滿足の情を以て、

感興に富みたる說教を謹聽し 又た月々發刊する雜誌を繙ひて、社會理想の或斬新なる考察の光明裡に沐して、微笑むのである。併し、彼等は決して其路傍に於て、彼等の本務を遂行することをせないのである。今、夫れ、前途を眺めて、新しき日の曙に輝く天を打ち仰ぐは 實に是れ壯快なることである。けれども、空に輝く光明にして、未だ曾て吾人の脚下の地上を光曜し、吾人を待ちつゝある日毎の事業を、吾人に示さぬものは決してないのである。

第三、世間には、幾多の慣例や、習俗あつて、頑乎にも、吾人が、未だ慈善の本務を實行せざるに當りて、早くも、之を妨害し、之を壓服するのである。一體、世間には、吾等を拘束する共通原則の存

するものではない。されば、吾人は各自に、自己の所作行爲を吟味し、且つ之を判斷せなければならぬ。しかし、世間に社會的風習、例へば、或種の階級にありては、命令的と想はるゝ所の純然たる形式的訪問や、誇大的の饗宴、乃至、精神なき、病的休養上の會合の如き、幾多の社會的風習の存するあるは、明白なる事實である。夫の政治的社會的制度の維持すらも、亦た一個の社會的風習なのである。而して、斯の如きは、實に實際の害惡を救濟するに必要なる時間と、金錢と、勢力とを消耗し去るものである。吾人は、誰でも、如何に世間の思惑を憚りて、世間並ならぬ事に、空しく手を退き、折角、胸中に勃興し來れる心情を抑壓して、而かも後日に至り、其卑怯

を悔むことあるは、皆な同樣に經驗して、忘れえぬものである。けれども、かゝる狀態に執着すれば、遂には、無殘にも、無情な人間となり果てるのである。吾人は、未だ吾人が本務の實行を怠たりしことを、自覺せざるに當りては、宛然、彼れ祭司が、路傍の負傷者を冷然看過し去りて、向側に、そつと角を折れた刹那の如き、其の感情程、恐らく吾人の多數に起り易き感情はあらじとぞ、思ぼし。所詮、吾等は誰も、其の宗教的慣例、若くは當時の慈善的風習を實行するを以て、吾人の同朋に對する責任を盡したり、と信じては勿らぬ。一體、やさしき氣性と、慈仁の意向を有する人民が、彼等の本務や、他人の貧窮を看過して、あたら空しく、其の一生を費すも

のである。

神は、諸君が銘々有する心情を、諸君に與へ玉ふて、而かも諸君が與ふる所の喜捨以上の、高尚なる目的のために、神は恩寵の手段を以て、常住、諸君の心情を充實し玉ふのである。ジョーン、カルビンは、此譬喩について曰つた。『人間は人のために造られたり』と。而るに、吾等は、吾等の本務を實行して居ない。若し夫れ、吾人にして、此物語の主人公の如く、吾人の周圍に於ける難澁者、貧窮者に對して、身親の奉仕をなす程の、男子らしき人格を充實し、發揮するに非ずんば、此譬喩を、吾人に與へ玉ひし人間、即ち吾濟の審判者の臺前に、敢て現參することが出來ないのである。

諸君は、いかに、基督耶蘇が『彼れ祭司が看過したり』てふ言葉を、幾度も、繰返し玉ふたことを注意せよ。斯の如く、吾等の多くは、我心にかられて、慣習的の教會費を拂ひ、慈善を施しつゝ、而かも男子らしき人性を逸却して、空しく其の行路を辿り去るのである。あゝ、實に、這般の世界の罪惡は看過せられ、人々は獨り苦惱し、品格は打ち壞され、生命は其の復活のあらゆる機會を逸し、而して、社會問題は、無鐵砲に、增大して來るのである。何となれば、眞に吾等は、吾等の通りかかりの難澁者に向つて、其が要求する所の愛と、世話とを、身親らなすことを、敢て欲せないからである。

爰に、吾等が、どうしても、看過することのできぬことがある。

それは、吾が基督か、吾等を隨傚せしむる爲めに、示顯し玉ひし所の慈善は、個人の心情より湧き出づる所の慈善である、といふことである。又た、今日、博愛の法則や、慈善の理論的教訓を、十分論戰する必要について、一言をも述べ玉はざりしことである。彼は、又た、慈善に關する國家の義務については、一言をもなし玉はぬ。慈善の機關は、最も肝要なる機關である。もし之の機關なくんば、恰かも、何等の人爲的方法によりても制限せられ、導かれざる水の如く、最も純粹なる愛と博大なる意向とは、却つて、社會の健全に、害惡とならざるをえない。しかし、基督が此譬喩に於て顯證し玉ふ所のものは、健實にして効驗ある慈善の、よりて保たるゝ所の一切の

制度機關よりも、先づ第一に、其制度機關を活用して、無用の長物たらしめざる所の源泉を得べきことである。即ち、個々の慈善的天才を得ることである。茲に、彼が地上に光臨しまして、人類を教化せんが爲めに示し玉ふ顯證がある。それは、畢竟、世界の善良にして、且つ偉大なる各事物の究竟の源泉は、性格と心情である、各自の有する愛である、覺醒である、勇猛である、機敏であるといふ事である。同樣に吾等の慈善機關すらも、又た此の教訓を要するのである。

そこで、終りに轉じて、吾人をして善良なるサマリヤ人に就て、考ふる所あらしめよ。吾人は、基督が、如何に、其の物語の主人公

が、故意と來らずして、只だ彼が或る他の目的のために旅行し來つて、偶然にも、此の負傷者を見出し、而して之を救護したのであるといふことを、力籠めて宣ふ事を見るのである。彼は義俠と冒險のために、いかめしく駿馬に跨り、鞭くれて、騎り廻り行く武士ではない。大方、彼は、只だ、壹個尋常の旅商である。即ち、其商用のために、自己の驢馬にのりて來た所の人である。彼は持ち合せの熟練と、方法を用ひて、其の傷を繃帶し、自己の需用をさひて、油と酒とを之に注ぎ、彼れ生贄人（頻死者）を自分の馬にのせ、又たそがために銀二枚を支拂つたのである。而かも、なほ彼は之にてとまらず、更に忍持して、彼災難者のわずらひの間中、世話を

しようと決心したのである。彼は館主に向つて云ふ『此人を介抱せよ、費もし增さなは、我かへりの時、汝に償ふべし』と。

勿論、此物語には、二つの敎訓がある。即ち、善をなすことの非常に容易であることと、其の實行する本務を、全然貫徹すべきことの是れである。

愛と勇氣とは、何に拘はらず、あり合せを以て活動す。而して人々は、吾等の才幹力、又は吾等の豐富なる布施によりて、救はるゝものではない。只だ、却つて、自己の內に振興りて、意の如くなる所の愛と、精神力とによりて、救はれるものである。損傷、貧苦、孤獨の生活は、あらゆる路側に横はつてゐる。併し、彼等は憐れな賤しき

貧民窟に於て最も多い。扨て、富と智的卓越とは、必ずしも、心情を以て、他の心情に與ふる身親の奉仕、即ち其内にこそ博愛心慈悲心の存する躬自の奉仕を助くるものではない。されば、決して諸君は、諸君の才能の低きによりて、失望する勿れ。否な其の非常なる卑下が、却つて奉仕の機會を諸君に與へて、而して、強者富者には、却つて與へられないといふことを覺悟せよ。

諸君が一度、人を救つたならば、救ひ通すまで、世話してやらねばならぬ。若しそうでないならば、始めから難澁者に觸れぬか、優である。或る悧發な佛人が、一時的なる不合宜なる救濟に就て、かう云つて居る事がある。『其救つた不幸の半分を更に創造り出してや

つて、而かも、却つて、其の創造り出してやつた不幸の半分をも、救ひ得ないのである』と、誠に妙味のある警句である。

扨て、或論者が云つた、基督の譬喩は、如何にして、此善きサマリヤ人の心中にありし心情を把得するかと云ふことを、吾人に語るものにあらずして、たゞ其の場で其心情と良心とを流露した、ひとりの人を顯證して居るのみである。此人が其本務を實行して、却つて宗教にこりかたまり、宗教を甲裝ふて居る所のものが、其本務を怠り、本務に背ひて居るのである。彼は唯だ聖典の一部、即ち舊約五書の外は、何物をも有たなかつた。宗教上憐れなサマリヤ人であつた。基督耶蘇が『汝儕は拜すべきものと、救はユダヤ人より出づる

ことを知らず』と曰ひし半異教徒であつた。果して然らば、彼は、基督が、吾等に例證として示し玉ひし其心情を、何處に於て、修得したのであるか。此譬喩に於けるが如く、其心情が、亦其路に偶然降つて來たのであるか。或は又吾人は一説――今日多數のものゝ主張する通り――必ずしも宗教は博愛に必要なるものにあらず、又吾人が、救助者たらん動機と恵とを欲する時には自然吾人は朴素なる自然の人情を喚起するものであるといふ一説を採るべきであるかと。

吾等は、斯の如き論者に答へん、然らば、誰か此善きサマリヤ人を創造したのか。誰か其祖源であるかと。吾人は、此主人公よりして、譬喩の作者に思ひ入らなければならぬ。吾人の先輩は、この善

きサマリヤ人の内に、基督を見、基督を會得心證し、遂に此物語をして、吾が基督耶蘇の救世事業の譬喩説話となしたのである。諸君は、其詳説を記憶してゐる。こゝに盗賊の内に陥つたものは、其罪悪の内に捕はれた罪人であつた。祭司と僧侶とは、舊約聖書の制度――即ち救はずに看過し去る所の律法と預言であつた。基督は善きサマリヤ人であつた。其の油と酒とは、聖晩餐であつた。其の旅館は、教會であつた。其の約束は、基督の威力ある恩寵の誓願であつた。勿論、此譬喩の一として、基督御自身より光現せざるなきは、眞實にして、吾人の早や冗言を要せざる所。此善きサマリヤ人は、舊約五書の所生にもあらず、教養せらぬ自然の人情の所産にもあらず、

只だ基督耶蘇の御心意の所生である。而して、此心意は、吾人が若し、此を創造せし主人公の愛と、勇猛と、健實と、實効とを得んと欲せば、吾人自身に探求せなければならぬ心意其のものである。此等の性質は、基督御自身の内に、最も活きて輝く實證である。人に對し玉ふ其の御態度の内に、其の御使命の内に、其の十字架の精神の内に、光曜して居る實證である。吾人は救助なき吾等に垂れ玉ふ、吾人か經驗する如き、基督の恩愛と又た吾等を救ひ、吾等を復活せしめ玉ふ其の御力とを、到底十分に、他の源泉より汲むことは出來ぬ。見よ、實に此の譬喩の作者を、恰かも一説話の如く、善きサマリヤ人を案出せし彼は、其の實際生活に於て、彼の如く高尚な

人格、高尚な奉仕を創造し、又今も尚ほ創造しつゝあるのである。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

いたづらに、愛を説かんはおろかしや、
渇けるひとに、清水さゝげよ。

譯者

エサウの零落

恐らくはエサウの如く――妄りなる事をなすものあらむ。彼は一飯のゆゑに、其の長子の權を賣けり。
（希伯來書、十二章、十六節）

全聖書を通じて、イサクとレベカの長子よりも、一層すぐれて、吾人の研究に資して、有益なる人物は、殆んど稀である。遠く我等に傳へて、今日に至れる彼の物語は、彼の死後數百年にして、始めて其の複雜なる形態を完成したものである。其の描寫の内には、彼が子孫の名稱の字義よりして、抽出したる形相か、色彩されて居ると主張する提唱は、恐らく正當であらう。何となれば、エドムは赤を意味し、エサウとセイル（彼が居住せし地なり）は毛深きことを

意味するからである。猶ほ、又た彼の性格の一部は、彼の子孫が、イスラエル人に相對反立して、發展したる性質の反映である、といふ説も正當であらう。

エドムとイスラエルとの兩國氏は、同一宗族より分れ出でゝ、隣り合つて住居して居つたものであることは、分明である。然し、其の居住せし土地、其の從事せし職業、其の發展せる國民的性質に於て、彼等は、全然相異して居たのである。初期のイスラエル人は、牧羊者であつた。質朴安靜にして、平和なる人民であつて、天幕の中に坐臥して居つた。所謂太古自適の民であつた。けれども、遠謀ある、忍耐なる而かも機敏なる人民であつた。而して、其の自然そ

のまゝの性質は、賦與せられたる天啓の感化に因りて、如何なる他國民も、到底光顯し得ざる程の、非常希有の宗教的天才にまで、發展したのである。之に反して、エドム人は、其の原始に於ては、唯だ性急にして亂暴なる獵師、若しくは、戰爭者に過ぎなかつた。其の性質は、彼等の安住せし懸崖多き鄉地の如く、ごつごつし、又た其の精神的要素に於ては、一層空乏であつたのである。固より、彼等にしても、其の崇拜の神、及び其の祭壇を有して居つた。けれども、其の宗教は、殆んど、全くイスラエル人をして、魂迷せしむることなかりし、といふ點に於て、シリヤ民族の宗教中で、甚だ異趣なものである。エドム人は、此の方面に對しては、全く無能であつ

たらしい。此の民族より出でたる少數の歷史的人物は、(就中ヘロデ家の人々は、甚だ有名である)悉く粗野、亂暴、殘忍にして、政治的關係より指導するにあらざれば、彼等は宗教に對して、何等の興味を持たなかつたのである。されば、「妄」てふ語よりも、一層劃當して、よく此の民族を說明し得る言語はなからう。併しながら、エサウと其の國民との類似は、決して完全ではない。其の國民の或る性質は、エサウの描寫に表顯して居ない。例へば、彼等の商業的天稟、其の有名なる俗智、乃至預言者と、詩篇の記者とが、幾世紀に渡りて、異口同音に絕叫し、獅子吼した所の彼等の無情無慈悲といふが如き性質は、毫もエサウにはないのである。此の物語に現はれ

て居るエサウは、優にやさしく、而して單純温和なる性格である。斯の如き相違を説明して、此はエサウ物語の製作せらるゝに至る迄は、イスラエルが、上來叙し來るが如き、エドム人の顯著なる性質を知らなかつたためである、と言ひ去る事は、斷じて出來ないのである。寧ろエサウの物語其のまゝが、或一個の性格、及び經驗の深刻悲慘なる記錄であつて、寸等も國民性の多少不確實なる反映でない、といふ事を立證して居るのである。此の物語の吾人に提供する價値は、實に此點に存じて居るのである。エサウの境遇を見ても、其の機會を見ても、若しくは其の性質を見ても、はた其の悲劇を見ても、我等は舊新約全書中の殆んど如何なる人物よりも、優れて多大に、我

等自身の經驗の、げに其憐む可き事實と、嚴なる可能性に類似した る事態とを見出すのである。エサウは、天より墮落せる惡魔の如き亂狂なる、若くは巨怪醜惡の罪人ではなかつた。彼は人間らしき普通の方法によりて、罪業を侵したのである。即ち罪業の中へ生れたる事、他人、及び自身の罪、日毎の誘惑、又たは鄙吝なる誘惑、不注意、乃至、等閑視にせる慾望の突如たる勃發などの因緣により て、罪業を侵すに至つたのである。エサウは、人をして、厭憎の情を起さしむる樣な人間でなくして、寧ろ一種の引着力を有して居つたものである。苟も、或る人物より何等かの事物を學ばんと欲せば、其の人物に對する同情の一念を起して、其の人物と一味の仕事

をなす心持にならねばならぬ。エサウの物語には、我等の研究を促す多くの事柄がある。一切萬人の罪惡を包む秘密、誘惑に對する吾人自身の經驗、若しくは、傷付けられたる温和なる性質に對して、感ずる悔恨の情念、願くば、我等の此等の經驗が、エサウの生涯に於ける中心的欠點と悲難とを、一層明白ならしむる力用とならん事を。何となれば、エサウの欠點は、即して是れ我等の欠點であるからである。

＊　＊　＊　＊　＊

第一に、エサウは其の出世からが、既に罪である。此點に於て、彼れ自身は、素より責任を負ふて居ないけれども、遺傳と誘惑との

問題は、彼の生涯の劈頭より顯生して居るのである。彼の父と母とは、其の子の性格の多くの點に對して責任がある。イサクとレベカの例か、すべての新夫婦の爲めに祈られるといふは、吾英國教會の結婚式に於ては、誠に不思議なる事である。イサクとレベカの生涯は、此の世界に於ける最も美しき詩の一破壞なり、といふ可きものである。彼等の愛情は、小説に始まりて、野鄙に終つて居る。最も慶賞すべき眞實なる約束に始まりて、最も鄙俗なる不平と虚僞とに終つて居る。然し、こは當然そうあるべき筈のものである。何となれば、たとへそこに、優美と不思議の籠とあるにしても、そこには始めより、神に對する敬虔の念に欠けて居たからである。即ち

小説はあつて、然かも大切なる宗教か欠けて居たからである。又た一の心情は、他の心情に與ふといふ事はあつても、二つの心想を神に依託する信念に欠けて居つたからである。一男子駱駝に乘じて、遠く地平線の彼方より來り、家庭の用務に、いたいけもなく、いそしむ乙女を驚かして、其の家より伴ひ去るといふは、宛然一幅の好畫圖を見るが如き説話である。けれども、彼の女にして、神自身か、其の使者と共に來降し給ひしことを感ぜず、はた神の弘誓の縁に惠導せらるゝ如くにして、出て行かざりしならんには、そは何等の役にもたゝぬ。如何に、彼女が夢の中に想ひ畫かれ、如何に遠く捜し索められしかを聞かされなば、固より彼女は、刺心斷腸の思ひに咽び

泣いたであらう。さりながら、若し斯の如き瞬間の得意に、何等の畏懼、何等の良心、はたこれにふさはしからん努力の攪雜らなかつたならば、必らずや、其の迷妄の、一度は覺醒し來たはづである。

眞實なる繪畫の報ひは、鄙吝である。一味宗教なる小説の報ひは、野卑である。而して、野卑と、鄙吝とは、イサグとレベカの結婚後、其の生活に於て、最も勢力を占有し居る所の性質である。彼等の家庭は、忽焉として、二つに分離されたのである。即ち父と兄と、一團となり、母と弟と、又た他の一團となりしか如くである。其の父は、山海の珍味を食せざれば、其の子等を祝福せず、母は父の盲目

に乗じて、父と兄とを、巧みに欺き、弟をして利己的なる殘惡なる虚僞を働かしむるに至つた。さらば、レベカは如何になりしか、素知らぬ人の戀語りに、其心躍らせし、純潔無垢なる少女、彼れレベカは、虚言に巧な誇大性の老婆となり了つたのである。これ、果た單に感情の一氣に支配せられし報の結果である。如何に少年少女の心情か、潔白清淨雪の如くなるも、又た彼等の心情を踊躍せしむる戀か、如何に純淨であるにしても、それらは如何にもあれ。彼等にして、若し單に其の事をのみ誇り、又た一味其の甘露美薰に醉ふに止住らば、必至其の夢やかては醒めて、遂に墮落の淵瀨に陷るのである。此の不肖を救濟する者の、是れ果た戀の不思議力にもあらず、若しくは、其の熱情にもあらず、唯だ宗教と良心と畏敬の念である。

斯の如き母よりして、エサウは誕生したのである。彼は嘗て母親の虚僞なる性質を顯はさなかつた。けれども十分に、母の燥急にして、非宗教的なる性質を繼承し來り、而かも、これを男性的に顯したのである。母は罪業の意義、及び其の結果に對して、甚だ横着なる考を有して居つた。(創世紀、二十七章、四十四、四十五節)他人の權利に對しては、一向に、頓着も、懸念もする女ではなかつた。假令、其の他人か、自身の良夫、若くは、實子なる場合に於てすらも、一向、其の權利を尊重しなかつた。約言すれば、神と神の支配との觀

念に、缺けて居たのである。エサウか忘れて居たのは、自分自心の權利なりしとはいへ、所詮は、母と同じく、其の無頓着なる性質をあらはした者である。即ち、同樣に、神と神との支配を忘却し、同樣に其の結果を無視したのである。之が爲めに、彼は滅亡したのである。罪なるものは、一時代より他の時代に推移するに當りて、其の形相を化して、更に一層恐怖すべき者となり果つること屢である。我等は、決して慾情を恣にする如き事例を、兒童に示してはならぬ。我等は、斷乎として、レベカの如き厭忌すべき罪業を、敢て犯してはならぬ。人生の旅路をたどり行くに、謹愼にして、細心ならんには、此かる罪業より脫却することが出來るのである。然れど、

若し、躁急にして、些細の誘惑にすら、自制の力を缺き、表面は宗教的なりと雖も、實際に於て、不誠實、且つ罪業、及び其の確實なる結果の恐るべきことを領解せず、又た外見は、よし尊敬すべく、且つ秩序正しうすと雖も、內實眞理に干涉し、良心を讓步せしむるが如きことあらば、我等は實に罪毒の濁江に、其の兒童をして感染せしめつゝあるものである。其の罪は、子供の內に爆發して、其局は終に激烈にして、亡靈的なる慘境に陷らしむるに至るであらう。

飲酒家にして、放蕩なる兩親は、其の次代のものに對し、影響を及ぼすに於て、危險の最たるものではない。何となれば、其の過度の放逸は、却つて屢其の兒等をして、反動を創起せしめるからで

ある。寧ろ、其の最も危險なるは、不注意にして、恒心なき不誠實なる兩親である。即ち、神及び神の統御に對して、若しくは罪の執拗性、及び不治性に對して、深刻なる思慮を有せざる親か、甚だ危險なものである。

聖書の本文には、エサウを目して、妄なる事をなすものと記してある。原語即ちギリシャ語の定義よりすれば、踏まるべきもの、即ち何等の防禦もなさず、誰だ萬人の踏躙に任する者といふ意味である。又た神聖なる境内、及び殿堂の外側の土地、即ち普通、または、公然の土地にも、適用されたる語である。故に妄なる（Profane）即ち殿堂（fane）の前にある者てふ意義を有する文字は、實に適譯と

いはねならぬ。

斯の如き家、即ち眞理、若しくは、神に對する畏れを以て、其の墻壁を建立せざる家を、レベカは、其兒童のために、準備したらしいのである。欺僞が、最も神聖なる母の唇頭に侵入し來つたのである。眞にこれは「妄」なる家である。此家に於いて、最も惡き事物も、其の跳梁するに任せられ、品性に對する極めて下劣なる想考か、行はれて居たのである。けれども、一家をして「妄り」ならしむるには、必ずしも、實際の欺僞、若しくは虛僞を要するものではない。野卑なる人生觀、神を忘却する事、兒童に對する希望の、單に物質的なる事、不親切なる饒舌、爭論、不平、又は信心者的口吻か、一家をし

て、「妄」ならしむる者である。子供の品性といふ者は、レベカの天幕にありしエサウの如く、斯の如き境遇の内に於ては、容易に善知識ならしむる機會はないものである。

エサウは、常に其の心を開放し、露出する人間であつた。諸君は、必ず、這般の人間を知るであらう。我等ならば、外界に對して、二三の通路を有する所なるを、彼は五十に及ぶ通路を有して居つたのである。天使降りて、之を守護するにあらざれば、斯の如き人物の危險と不祥は、甚だ大なるものである。然るにエサウは、天使の代りに、自己の周圍に、唯だ誘惑者のみを有して居たのである。優愛しき天使に守護せられず、尊き愛情に充たされずして、徒らに、彼

の心は、一切の事物の浸入に放任せられたのである。一片の主義なき彼の心は、飢渇の如き最も普通の慾情すらも、其の跳梁を制抑する事が出來なかつた。是が、即ち、聖書の『妄なる行をなす者』の意味である。即ち、守備なく、汚れたる開放露出の性格である。戸門に天使の守衛を有せず、内に優しき伴侶を有せず、祭壇には神燈を點ぜず、唯だ自己の慾情、母の憤怒、及び兄弟の奸策に打ち任せたのである。之に連續して惹起する悲劇に就いて、二個の注意す可き點がある。第一は即ち是れ。

ジョージ、エリオットは、其の著ロモラに於て、チトーの生涯の危機を描寫するに際して、(チトーとは諸君の記憶せらるゝ如く、優

しき性質の人であつたが、日毎日毎些細なる利己に耽りし事のために、漸々大罪を侵すに至つた人間である）次の如く云つた。『彼は如何にして、其の言葉が（チトーは、恰かも、其の父を拒絶したのである。其の拒絶は無用でもあり、また有罪でもあつた）彼の唇頭に上つたかを、殆んど知らなかつたのである。彼等には、時折り、感情か一切萬事を決して仕舞つて、我等は唯だ傍觀して驚く許りなりといふが如き有樣の瞬間がある。感情は、其の内に、罪のインスピーションを携帶し來りて、僅かに、一瞬時にして、長時間の思慮分別を要する作業を破壞し了るのである』と。エサウの場合も、正に此と同樣である。『エサウ、野より來りて憊れ居り、エサウ、ヤコ

ブに向つて、我れ憊れたれば、請ふ其の紅羹其處にある紅羹を我に飲ませよ』といふ（如何にも貪欲な言葉である）。ヤコブ言ひけるは、『何よりも、先づ汝の家督權を我に鬻げよ』。エサウ答へて云ふ、『我れは最早死なんとす、此の家督の權、我に何の利益をかなさんや』と。爾時ヤコブ言ひけるは、『何事よりも、先づ我に誓へ』と（六ケ敷き相貌をなしつ、斯く語れるヤコブの風態が、目に見る樣である）。彼即ち誓ひて、其の家督の權を、ヤコブに鬻つたのである。是に於て、ヤコブは、パンと扁豆の羹とをエサウに讓與してやつた。エサウ之を食ひ、且つ飲みて去つた。不注意の大道を通過して、斯の如く、エサウは、其の家督の權を貌視したのである（創世紀、二十五章、二

十九節、及三十四節）

此言葉の内に、エサウをして、致命的危機に落込ましめた、二個の習慣がある。一つは、食慾に打ち負ける習慣、一つは、自己に對して、誇大なる感情に耽ける習慣、即ち是れである。『我は將に死に瀕して居る』と、こは強健なる人にあり得べきことではない。我等は、此の言葉に於て、彼の母の不注意なる聲を聞くのである。此の肉體的、及び精神的の兩個の利己主義が、初めは、其の利己主義たる事を、半ば意識して居たのであるが、今は全然忘却せる無數の行爲により、益々増長して、終ひに、其の家督權を鬻ぐ、といふ危機に至る迄で、進んだのである。即ち、恐怖及び虚無の情に熱狂して、僅かに、一食の羹に迷ひ、終に其の名譽も、其の將來の幸福も、賣却し去りて仕舞つたのである。不節制にして、利己的なる人間は、徒らに、其の感情を誇張して、無意識ではあるけれども、必ず斯の種の恐怖、及び虚無の激情に熱狂する者である。

吾人は、何等か、強大なる慾情の爲に、其の生命、及び其の品性を、賣却し去るといふが如き、不覺に陥ることなしと唱つて、得意がつて居つてはならぬ、長い間には、却つて些細なる慾情の爲めに、反間さるゝ者である。大なる慾情に依つてよりも、寧ろ普通の我慾に依りて、精神的家督權を騙取される人が頗る多數である。例へば、容易に、吾人の習慣となる所の自己の幸福のみを欲する情念、若しは、

同じく、容易に、吾人の習慣となれる、はた細事にも、また大事にも、我執する癖習等に就て觀察するに、斯くばかり、生活上の權衡を妨害する者は、世にあるべくも思はれない。二者何れかの習慣に陷つた場合には、最も些細なる事柄も、もし心が之れに向ふなれば、非常なる不釣衡に、其が增長して來るものである。而して、斯の如き些々たる事柄も、單に、少しく、主張した爲に、何等か重大にして、非常なる事件かの如くなり來り、宛ながら、一食の羹が、エサウをして轉向せしめた如く、人をして人生に於ける重大なる權利、若くは機會より轉せしむるに至るものである。斯の如き人は、僅かに一歩を讓るに止まらずして、更に進んでは、其最善なる朋友を捨て、

純潔なる愛情を破毀し、高尚なる眞理を却失し、終には、救世の君をも、拒絶するに至るかも知れぬのである。恰かも、ペテロが恐怖の卑劣なる肉情に驅られたると、下婢の面前にて、僞を言ひ張らんとしたる爲とによりて、救世主を拒みしが如くである。又たエサウの記事に於いて、明瞭なる、なほ一つの習慣、即ち自己に關係して、何事も大袈裟に考慮し、自己に關係する種々の兆候を誇大にする、といふ習慣に就て觀察するに、吾人も、亦た、皆な、斯の如き傾向を有して居るのである。それがために、吾等は容易くも、大なる機會を取り失ひ、且つ高尚なる事業を成就することが出來なくなるのである。多くの男女が、其の不健康、其の疲勞過勞、乃至他人より受けたる非行

を、誇張過大にして、折角、神が彼等をして、高尚なる義務に、適當ならしめんとの御旨より、設備し給ひし訓練を、却つて、其義務より、遁逃し去る通路となし果てるのである。基督が光榮に至るの途上に於て、惱み給ひし同一の罪過に苦痛を嘗めつゝも、それがために失望落膽し、且つ殘餘せる全力を無用なる同情に訴へ、然かも通路に於て、最も無能なる友人の同情に訴へる事に費す基督信者は、實に腑甲斐ないてはないか。斯くの如き友人の同情に訴へるといふ事は、エサウが、其の狡猾なる兄弟に於けるが如く、誘惑であり、又た係蹄である。我國に於て、失敗せる經歷、乃至沒收されたる家督權を見るに、そは必ずしも、泥醉者の墓場に於て見出さるゝでなくして、

又た夜間街道のあやめも分かぬ暗がりの内に、待ち伏せして居るものでもない。寧ろ幸福なる家庭、莊嚴なる教會の座席、及び多くの恭敬すべき、而かも一見成功せる、且つ財産ある地位に於て行はれる樣である。此等は、教會や、國政を指導せんために、且つ一般民衆の間のインスピレーションのために、必要とせられたのである。慰安幸福を得んと欲する下劣の愛情、傷付いたる虛榮心、重要若くは微弱なものに對する利己的誇張、又たは人をして强力ならしむ可き努力に對して、卑怯にも打ち負ける等の如きは、人々をして、其の義務及び大なる權利より轉逸せしめたのである。

エサウが侵したる致命的罪業は、假令毛深より生れ來たものでな

く、又た放奔浮躁なる獵師でもない。寧ろ率直にして柔順なる、且つ敎會に參詣する我等にしても、容易に繰り返す所作であると、いふ事については、上來十分に説明したのである。

エサウが滅亡の過程に於ける第二の點は、即ち斯の如しである。彼の欲情は、彼をして、彼がはたと遇當せる所の、第一の策略家、（然かも、それは、彼れ自身の兄弟であつた）の餌食に供せしめたことである。余は此點に關して、青年の聽衆諸君に對して、最も腹藏なく、隔意なく、談じようと思ふのである。

諸君を誘惑する所の快樂、若しは慾情はないけれども、多くの男子女人が、自ら利益せんがために、其の慾情の通路に立ち添うて、

諸君を待ち受けて居る。早く成人ぶらんとする野心、若くは眞面目なる團體に於ては、見出さなかつた歡待、及び友誼を享樂せんと欲するといふ想像によりて、娯樂の生活に誘惑されてはならぬ。假令、其が飲酒であらうとも、又た賭博であらうとも、若しくは、更に一層まさりて、惡しき事であらうとも、斯の如き野心によりて、誘惑せられたる場合には、次の如き事を記憶して居なければならぬ。即ちかかる方面に於ては、諸君を待遇するに、人を以てせずして、單に憐む可き馬鹿者を以てし、且つ諸君か、彼等に對して、何等かの需用に立つ間だけ、諸君の同朋たる人々か待ち受けして居ると。殆んど、毎年、自分は斯の如くにして、墮落して行く人々を知つて居るのであ

る。臨終の寢床から、最も頻繁に往來した友人を振りすて、仲間同志の罪業の人に對する一層烈しき怨恨の念を起し、悔恨の情に充ち滿ちて、至高なる裁判者の現前に出た人々にも屢々ある。

最後に、我等をして、「妄りなる」といふ言葉に立ち返りて、考ふる所あらしめよ。何となれは、是か全罪業の中心であるからである。

青年男子諸君よ、諸君の品性を守護し玉へ。凡俗に陷り玉ふ勿れ。ジョン、ミルトンは、其の大學時代に於て、罪惡より罷脫したる事に就いて、如何に語つたのであるか。彼れ曰く『一種緻密なる性質、及び既に成就せし所の、若しくは、將に完成せんとする所の者に對する率直なる自重心、嫉妬者として傲慢なりと呼はゝ、其の呼ぶに

任せしめよ。而かも、又た少しは僭越らしく見ゆる公言を試みても、全體の內にある「謙遜」の性質に免じて、大目に見られた事の如きは、相共に其の助力を與へて、余の墮落を防止したのである』と。余輩は、諸君か些細なる惡事に對しても、稠到にして、一毛を餘さぬ程、用心深からんことを切望して止まぬ。例へば、眞實を語る可き事に就いて、考へて見るに、多くの人は、僅少の虛僞は、罪惡にあらずといふ位に、思惟して居るらしく思はれる。けれども、此れは一個の大なる誤謬である。斯種の訪客を容るゝ樣な人は、如何なる事物にも、其の門戶を開放するに至り、終には、必然其のものゝために、反間されて、恐る可き一大結果をかもすに至るのである。不健全なる思

想に對しては、常に頑强なる抵抗を試みよ。空虛といふものは、決して、神聖なるものではないといふ事を、記憶せなければならぬ。空虛なる心は、此人生に於ける、最も不安な、最も不神聖なものである。惡靈及び其七個の仲間か、掃除し、裝飾し壯嚴せられたる家に、如何ばかり、接近して居るかを記憶せよ。希くは、諸君の心をして、行住座臥、神聖と眞理とを以て、充滿せしむ可く周到の注意をなせ。我等の心理に、深くも染みためたる地上生活の中にありて、天來の永遠の生活を捕促する事、是れ實に必要なることである。決して精神生活てふ者を、我慾又は贅澤物にすべからずである。我等は屢斯の如くなし終ることかある。精神生活は、寧ろ最も强烈なる角力たらし

め、時折としては、苦痛ならしむることとすらも必要である。更に吾人は高尙なる事物の內に、吾人の生活を行營するとか最も必要である。高尙なる事物を實行し、銘肝し、且つそれに、我が心魂を打ち捧げねばならぬ。而して、肉體を最も純潔に保持し、一度び是等高尙なる事物に訴へらるる時は、鄙陋卑賤の感に對して、屢々起る場合と同じく、全身戰慄を感ずる程に至らねばならぬ。

余は守護の天使、即ち愛情の現前か、良心及び苦痛に次いて、吾人の心を、淸淨に保持する助勢をなす者なり、といふ事を述べた。愛情の現前、神聖なる兩親、忠實なる同朋、純潔にして、且つ尊貴なる愛情、凡て此等の者は、人をして自暴自棄より罷脫せしむる者てあ

る。然し神は我等に、救世主を惠み給ふたのである。救世主とは、取りも直さず、キリスト、イエスである。嗚呼、是れ全世界に取りて、何たる過分の恩惠であらうか。されば、諸君一切を捨てゝ、先づ基督を捕捉せよ。彼は常に諸君の近くに在しますのである。青年時代には、以前よりも、一層近づいて居らせ給ふのである。若し、諸君が、今、彼れを拒絶しても、必ず彼は後年に至りて、再び諸君に光顯し給ふのである。彼をして信仰によりて、諸君の心裡に宿らしめよ。然らば、心中の至聖の靈龍は淨められ、其祭壇は、常夜の燈が點火されるであらう。諸君は、彼れが諸君に對して、望み玉ふ所の者を、知るや、否や。自分勝手の束縛を設ける事、單なる處置を信ずる事

信仰箇條に固住執着する事等の如き、何れも、皆な、彼の望み給ふ者ではない。彼の望み玉ふ所の事は、全心全靈を活ける愛、及び勝利せる標準に打ち捧ぐることである。かくの如くにして、彼の信者歸依者が失敗したゝめしはないのである。

エサウとヤコブとの相違を生じた事情は、稍々同樣の消息を傳へて居る。ヤコブは、我等の想像し得る最下最弱の人間であつた。然るに、彼れは確乎として、神に信依し、神にいつさまつり、其祝福を享りはづす事なく、終ひに精神上の大人となりて、此世を去つたのである。此所に、列席せる何人も、そうである。最も自己の微弱を感ずる人は、誰れであるか。最も自己を信ぜざる人は、誰れであるか。未だ

嘗て、打ち勝ちし事なきのみならず、幾度も幾度も、恥辱を蒙り、誘惑が待ち受けして居るために、前途に一味失望をのみ感ずる人は、誰れであるか。我が兄弟よ、神の愛は、汝にまで及ぶのである。基督によりて、其の愛を握れ。汝の意志を、神の意志に隨順せしめよ。而して一度び、最も微弱なる努力を試みるや、神の愛は、非常なる信任を以て、汝に接近し、神の御力は、勝利の保證を以て、諸君に加被せらるゝであらう。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

ふちぶれしエサウに歎かば、明靈の、
生命の神に、いつきやまつれ。　譯者

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

近世講壇叢書

▲近世講壇叢書は歐米近世の説教家の説教の精粹を譯したるものなり。
▲近世講壇叢書は毎卷菊版半截百頁内外の清雅なる製本にして毎卷三篇以上を載すべし。
▲此の叢書發行の目的は一は講壇の最良産物を紹介して信者求道者の良き讀物たらしめ、一は我國講壇の水平を高めんとするにあり。

(第一) 犧牲の燈　ロボルトン、ニコル著　富永德磨君譯　定價拾貳錢　郵税貳錢
(第二) 神に到る道　ポスウオルス教授著　開拓者編輯局譯　定價六錢　郵税貳錢
(第三) 聖なる父　フオルサイス博士著　今泉眞幸君譯　定價拾五錢　郵税貳錢
(第四) 招かれし人　デビドソン教授著　大谷虞君譯　定價拾五錢　郵税貳錢
(第五) 信仰の勝利　ロバートソン著　文學士小松武治君譯　定價八錢　郵税貳錢
(第六) 神興の流　ナヨオヤアダム、スミス博士著　文學士吉田修夫君譯　定價十五錢　郵税貳錢

253
783

柏井園君編

ヨハネ傳研究

自第一卷至五卷　定價　各二十錢
郵稅一、三、卷各四錢　他各二錢

ヨハネ傳は耶蘇の內部的生活を傳へ神祕的情味に充てるものにして新約書中最も幽玄なる思想に富むの福音書也而て之を讀み之を解するが爲に最も要用なるものは適當なる註釋書なり著者拮据多年歐米諸家の著述を參考して此研究をなせり丁寧明暢なる文字を用ゐて何人にも解し易からしむ加ふるに初に詳細なる緒論を附し結ぶに研究的論文を以てせんとす心靈の糧食を得んと欲する人は宜しく之を含味して大なる養を得て可なり

日本基督教青年會同盟本部出版
（振替貯金九三〇一）

253
783

柏井園君編

ヨハネ傳研究

自第一卷至五卷　定價　各二十錢
郵稅一、三、卷各四錢　他各二錢

ヨハネ傳は耶蘇の內部的生活を傳へ神秘的情味に富てるものにして新約書中最も幽玄なる思想に富むの福音書也而て之を讀み之を解するが爲に最も要用なるものは適當なる註釋書なり著者諸據多年歐米諸家の著述を參考して此研究をなせり丁寧明暢なる文字を用ゐて何人にも解し易からしむ加ふるに初に詳細なる緒論を附し結ぶに研究的論文を以てせんとす心靈の糧食を得んと欲する人は宜しく之を含味して大なる益を得て可なり

日本基督教青年會同盟本部出版
（振替貯金九三〇一）

明治四十一年六月廿八日印刷
明治四十一年七月五日發行
（定價拾五錢　郵稅貳錢）

譯者兼發行人　東京市小石川區關口臺町二六ノ八　吉田脩夫

印刷人　東京市神田區美土代町二丁目一番地　島連太郎

印刷所　東京市神田區美土代町二丁目一番地　三秀舍

發行所　東京市神田區美土代町三丁目三番地
日本基督教青年會同盟
【振替貯金口座九三〇一】

THE GOOD SAMARITAN

GEORGE A. SMITH.

特61
160

神興の流

国立国会図書館

020795-000-7

特61-160

神興の流れ

ヂョーヂ・アダム・スミス/著

M41
ABI-0621